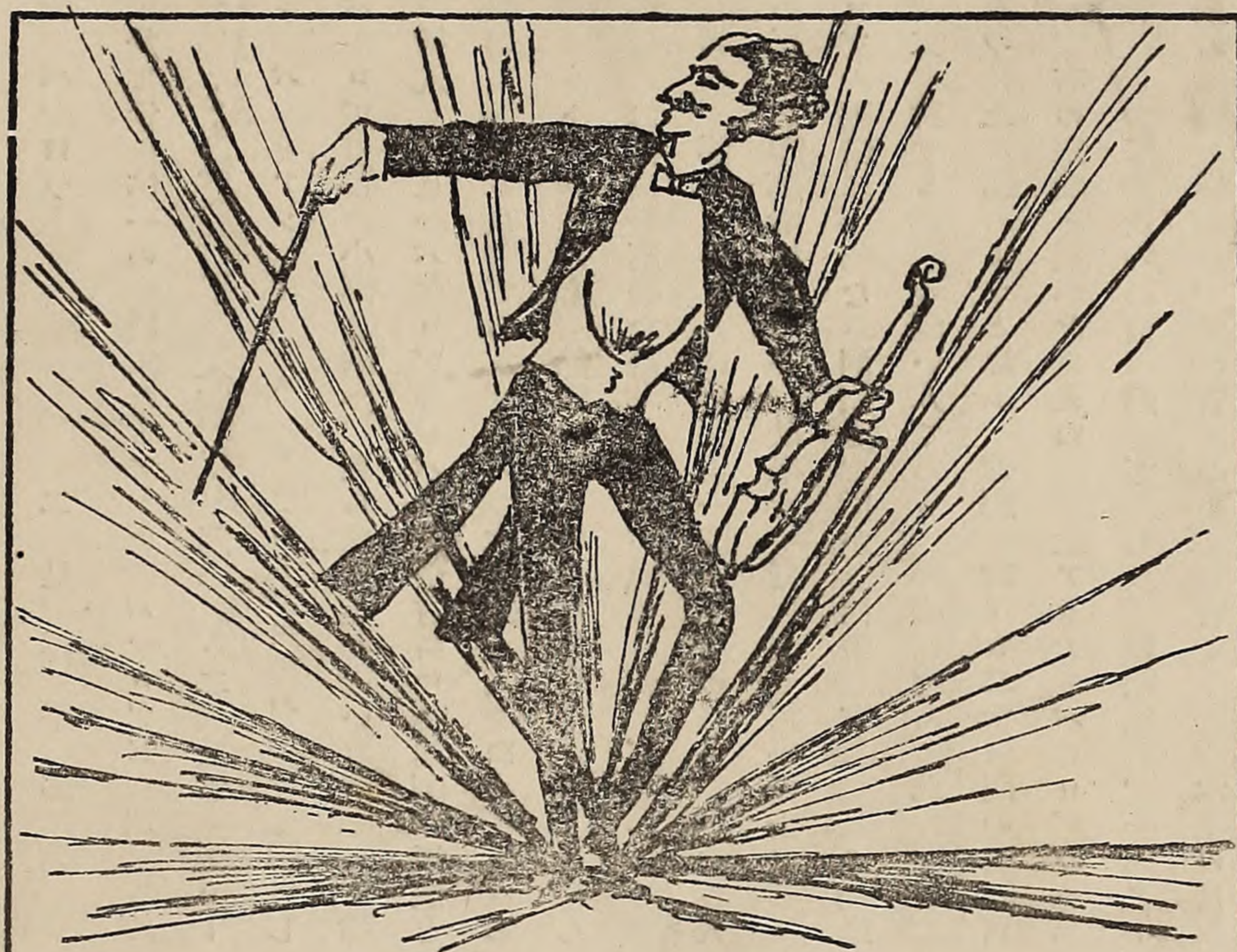
明治四十三年六月六日第三種郵便物認可
大正十一年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

音樂

第十三巻第十一號



山葉 ピアノ / オルガン
西川 ピアノ / オルガン
鈴木ヴァイオリン
蝶印ハーモニカ
ホーナーハーモニカ
和洋管絃樂器
高級舶來ピアノ
舶來蓄音器
和洋樂譜樂書

發賣元
京橋區竹川町十四
宮內省御用達
共益商社
賣店、神田、神樂坂、橫濱馬車道通、同姿見町、名古屋

（東京市神田區美土代町　三秀舍印行）

新刊紹介

■アンナ　パヴロワ　　二見孝平譯編

或る意味に於て世界第一の舞踊家たるアンナ　パヴロヷが來朝するにつき、其片影なりとも傳へたいとの念願から、篤學なる二見氏がオスカービー、パウル　バルヒアン、マックス　オスボーン三氏の論文を譯出し之に有名なパルロヷ自著の小傳を添へ、更らに舞姿を畫いた興味ある挿畫と、寫眞を挿入し、且つパヴロヷのレパトア中有名な舞踊劇の梗概を加へた丁寧親切を極める良著である。四六版六十頁に滿たぬ小著ではあるが、全部ポイントであるから、餘程の量を收めてゐる。さうして殆んど各頁、否各行に二見氏の篤學な研究的態度が窺はれて涙ぐましい程の感激を與へられる。傳せられる人は當代第一流の舞踊の名手、評する人は獨逸評壇の巨匠、譯纂者は我學界青壯學者中稀に見る篤學の士にしてしかもパヴロヷの藝術に賢明なる洞察と、暖かき同情を有し、且つ獨逸語の造詣と詩文に對する趣味の深い人である。評者は喜んで此好著を世の藝術愛好家の机上に薦めようと思ふ。帝劇に於ける二十日間の長期出演に於て、未曾有の感銘を與へた見えぬ翼の主アンナ　パヴロヷの面影は永く此好著によつて諸氏の眼前に甦るであらう。總銀紙裝、全部アートペーパー刷の高貴を極める、眞に寶玉の如き美書である。本年の出版界中異色あるものの一つであらう。銀座アルス、定價一圓二十錢。

每月一回一日發行

定價（壹ケ月（一冊）金參拾五錢／半ケ年（六冊）金貳圓／壹ケ年（十二冊）金四圓）郵稅共

會友證御希望の方

會費（半ケ年（六冊）金參圓／一ケ年（十二冊）金五圓）郵稅共

□御注文の際は前金御拂込之事。

□前金盡きたる時は前金切の赤印を用ゆ。

□前金は本校本會宛。振替貯金口座（東京二〇六二番）に御拂込下さるべし。

□原稿〆切りは每月五日のこと。

□寄贈の書籍雜誌は必ず本會編輯部宛の事。

□本誌へ廣告御希望の向は直接御申込被下度候。

廣告料　一等　二十圓　二等　十五圓　三等　十圓

大正十一年十月廿八日印刷
大正十一年十一月一日發行
【定價金參拾五錢】（郵稅壹錢五厘）

編輯兼發行者　東京音樂學校學友會

代表者兼發行者　東京音樂學校內　牛山充
東京市神田區美土代町二ノ一

印刷者　島連太郎

發行所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　東京音樂學校學友會

印刷所　三秀舍

賣捌所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂

區袋町日本メソヂスト教會に於て勝部武雄氏司式の下に結婚式を擧げられ候由慶の至りに候。高階氏、及び新夫人の新居は東京府下の西巣鴨町向原三四四〇に候。

■清水金太郎氏ば下谷上野櫻木町五番地に轉居せられ候。

■龜井はな氏東京府立第五高等女學校を辭任せられ、後任として浦和高等女學校より安藤タカ氏來任せられ候。

■近衞秀麿子は東京帝國大學青年會音樂部を指揮して東北に樂旅を試み、好成績を擧げられしが、これを東京に於て公開すべく十月十四日午後七時より本郷追分青年會館に於て、ビゼー、シューバート、モーツァルト、ブラームス、バッハ、チャイコフスキー、ゼーダーマン、ベートーヱンを演奏せらるべく候。

■細田氏等の東京プレクトラム　ソサイエティーは十月廿八日午後六時より京橋金六町京橋會館に於て第二回演奏會を開催せらるべく候。

■青柳善吾氏の名古屋市鄉土唱歌は大正九年四月に第一版を、十年九月に再版を發行し、此種の唱歌の嚆矢としても、又歌詞、曲譜共に細心の注意をして、理想に近からしめんとの努方の明らかに認めらる點に於ても推稱すべきものとし識者間に好評を博したりしが、去る七月更らに修正を加へて第三版を發行せられ候事喜びに堪へず候、鄉土荒廢の聲の高き昨今地方青年をして歸土を愛し、故園をいつくしむ情を一層切ならしめんがためにも、鄉土唱歌の作成は音樂の道に携はる者の忽緖に付す可らざるものと存じ候。青柳氏の此著が斯かる方面にも良好なる刺戟を齎らすべきを信じ、修正版の成りたるを天下のために喜ばんと欲し候。

■尾熊善次郎氏は七月二十九日無事に伯林に到着、左記に宿所を定められ候由御通信有之候。

Herrn Z. Oguma,
bei R. Kirchner.
Hildegard Str. 19III
Berlin Wilmersdorf,
Deutschland.

■兩角登志子氏(舊姓松岡)は今迄米國に滯在せられしが、九月十六日頃紐育を去つて獨逸に赴かれ候由、彼地にて同級會を開くを得ん云々との御通信有之候。氏の同級にては佐藤節、相馬ナツ兩夫人、高折宮次氏を加へて四人異鄉の空の下に相會すること不思議の緣と存じ候。

■高井みつ氏(舊姓櫻井)は今度茨城縣那珂郡石神村に居を定められ候。夫君が今回同地に於て醫術開業せられたる由、御鄉里に近きことに候へば、定めし御便宜多きことゝ存じ候。

■高折宮次氏は今回文部省海外研究員として獨逸國に赴かるゝ由、御健康を祈り候。

■高勇吉氏も某氏の後援の下に海外留學の宿望を實現せらるゝことゝなり、十二月頃出發の運びとなり候由、慶賀の至りに候。

■室崎清太郎氏は神田敬文館より童謠と遊戲第一集を公けにせられ候。印牧季雄氏振付にて面白きもののやうに候。

コフスキーの『ピック ダームI』、『エウゲン オネーギン』、ルービンシュタインの『惡魔』、ダルベールの『ティーフラント』、『盲目』、及び波蘭土作家品、ツェレンスキーの『コプラーナ』、アダムスの『バピーノのレイ』（初演）、モニウスツコの『ハルカ』スツィマノフスキーの『ハギート』があり、其外にチェレプニンの舞踊二つと、スツキーの舞踊（バレー）『パン トゥワルドフスキー』があつた。此舞踊は一樂期に百回以上演奏された。次の樂季にはコーペンハーゲン歌劇座で上演される。

* * *

■ガルリークルチは八月十六日に紐育州のサラゴタ鑛泉地、同廿日の午後アトランティック シティーで歌つた。其外はスケッチブックのリプ ヷン ギンクルの話の中に出て來るキャッキル山中で夏を送り、休養と共に此處にある所有地に新築中の英吉利西式の別莊の建築工事を監督してゐる。

■フリーダ ヘムペル今年の夏瑞西のシルス マリアに居つたが、十月二十四日亞米利加に渡るに先ち、十六、十九の兩日倫敦のクヰーンスホール、二十二日にアルバート ホールに出演する筈である。亞米利加には十一月に着き、六日にモントリールで、ボストン交響管絃樂の獨唱者として樂旅を始める。紐育に於ける第一回の獨唱會は十一月二十八日になつてゐる。

海内樂壇

演奏

■九月二十九日午後有樂座で藤蔭會の第十一回舞踊會があつた。同日はアンナ パヴロヷ夫人の一行を招待したので、夜とは番組を變へ、最後に靜江女史の『手習子』を入れたが、西洋模倣の『秋の調』や『落葉の踊り』が苦心の割に效果が少なく、稍物足りなさを感じさせたのを此『手習子』で埋め合せたやうな感があつた。

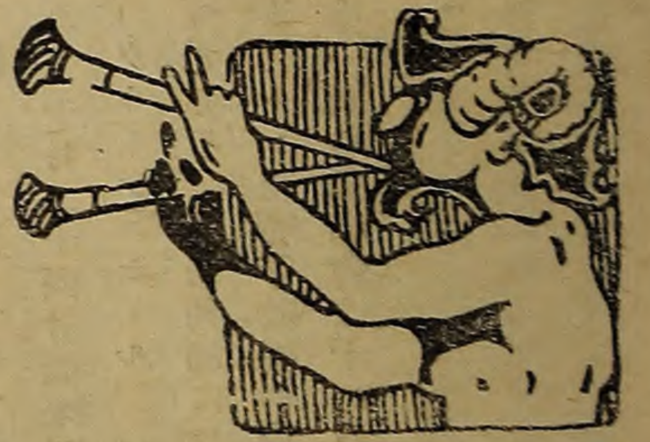
■十月十四日午後七時より本郷追分の帝大青年會音樂部の管絃樂の夕べが開かれ、近衛秀麿子の指揮の下に左の曲目が演奏せられた。

一、管絃樂『カルメン』の序曲、ビゼー。二、管絃合奏、甲、絃樂四重奏曲、九番、ト短調、シューバート。乙、黄昏曲、モーツァルト。三、管絃樂、匈牙利舞曲、五番、六番、ブラームス。四、二重奏、第一ヴイオリン、菅野、第二ヴイオリン、（高橋、二面ヴイオリン）競奏曲、バッハ。五、管絃樂、甲、悲しき歌、チャイコフスキー、乙、農夫結婚行進曲、ゼーダーマン、丙、露國民謠、丁、土耳古行進曲、ベートーヴン。六、管絃樂、ニ長調交響曲、第一樂章、モーツァルト

樂人動靜

■高階哲應氏は相澤滿壽氏と婚約が整ひ、八月二十四日、牛込

海外樂壇



ワルサウ

■カロル　スツイマシフスキーは今迄器樂作家として知られてゐただけであつたが、今夏の初めにエミール　ムリナルスキーの指揮の下にワルサウの國立歌劇座で其第一の歌劇を上演した。表題は『ハギド』(Hagith)と云ふ。一九一三年の作であるから、彼のものとして初期の作と見るべきもので、其後極めて向上し、今將に發展の頂上にある彼の藝術の代表作と見做してはならぬ。併し之は彼の生涯の創作に一時期を劃するものであるから、作者自身にとつては極めて懷しみのある作である。出演者の立派な技術によつて、好果を收め、一般の受けもよく、終りに於ては殊に熱心な喝采を受けた。

■此作の歌劇の作者はドルマンで聖書の傳説に據つたものである。老王は死期に近づいてゐる。其命を救ひ得るものはたゞ今や將に人生の春の盛りに居る若い娘の愛のみである。斯くて彼れの白羽の矢は美しいハギートに立つた。此美しい娘は王の子の愛してゐる人である。三人の間、父、子、及び娘の間に劇的の爭ひが繼起し、ハギートは遂に犧牲として死神の殘忍な手に捧げられる。

■此臺詞に音樂を配するに當り、作者の靈感は色よりも寧ろ線に於て現はされてゐる。音樂の輪廓の方が絕對的に强勢を把握してゐる。全作の最大重要部は三つの二重唱、王と王子、若い王とハギート、ハギートと老王との間の三つである。此中で最後の二重唱が最も複雜でなくして、力は最も强い。合唱も皆美しい。さうしてハギートが一同に別れを告げる場の如きは豐麗な旋律に充ちてゐる。前に述べた如く旋律の美が全作の主眼をなし、之に最大の表現力を與へてゐる。

■此演出に際し、主要な役割は孰れも立派に且つ正確に歌はれた。波蘭土の保音歌者(テノーレ)中最も有名な人達アダム　デイガスクレツツインスキーの二人と、立役(タイトルロール)を歌つたワルサウ歌劇座の首席歌優(プリマドンナ)マリア　モクルツイツカ夫人、及び立派な低音歌者ソムツイーが夫々此成功に貢獻する處が多かつた。舞臺監督はポプラフスキー、舞臺裝置はウヰンツエンテイー　ドウラビーグで、二人とも盛んな喝采を博した。

■ワルサウ歌劇座の上演したものは『トウリスタン』、『ワルキユリー』、『ローエングリーン』、『ポエーム』、『トスカ』、『蝶子夫人』、『椿姫』、『アイダ』、『リゴレット』、『ホフマン物語』等の外に、チヤイ

二、奏鳴曲、ホ長調……………………………………ヘンデル

アルレグロ

アダージオ　カンタービレ

ラルゴ

アルレグロ、ノン　トゥロッポ

三、甲、クワジ　バルラータ……………………………スック

乙、熱情曲………………………………………………スッツ

丙、歌の翼に駕りて……………………………メンデルスゾーン

丁、狂想曲、廿四番……………………………………パガニーニ

四、甲、維也納狂想曲…………………………………クライスラー

乙、ロンド　ドゥ　ルタン……………………………バッヅィーニ

十月十六日

一、競奏曲、ニ長調………………………………………パガニーニ

莊嚴(アルレグロ マエストーソ)快速調

二、シャコンヌ(モルト　モデラート)……………………ギターリ

三、甲、華想曲(ロマンス)…………………………………ベートーヹン

乙、主題及び變奏曲…………………………………タルティーニ

丙、太陽への讃歌(『金鷄』)…………………リムスキイ―コルサコフ

丁、モルト　ペルペトゥオ………………フランク　ブリッジ

四、甲、夜想曲、變ホ調…………………………………ジョパン

乙、莫斯科の思ひ出………………………………キーニアフスキー

十月十七日

一、奏鳴曲、變ホ調作品十八……………リヒャルド　シュトラウス

アルレグロ、マ　ノン　トゥロッポ

アムブロギザション

アンダンテ

アルレグロ

二、競奏曲、ニ短調……………………………………キーニアフスキー

アルレグロ　モデラート

華想調(ロマンス)(アンダンテ　ノン　トゥロッポ)

終曲(フィナーレ)、ジプシー風に(アルラ ツインガーラ)、

三、甲、アヹ　マリア…………………………………シューバート

乙、續ぎ歌(アンバトゥ)…………………………………ポッパーアウアー

丙、船の中にて…………………………………………デビュッシー

丁、匈牙利亞舞曲………………………………ブラームスーヨアキム

四、甲、ギタルレ………………………………………モスコフスキー

乙、圓舞曲……………………………………………チャイコフスキー

丙、ハバネラ………………………………………………サラサーテ

東京演奏後十八、十九の兩夜横濱開港紀念館で演奏し、廿一日朝九時半の列車で名古屋、京阪神の演奏旅行に出發、月末歸京の上南葵樂堂、報知新聞等の演奏會に出演、十一月上旬觀光のため北京に赴き、支那各地を遊覽の上、海路印度洋を經、伊太利亞に曾遊の山河を訪ひ、佛蘭西を過ぎて歸英される。

ウナでないために其偉大を認め得ない歐米人と共に其愚を嗤はるべき者である。

此偉大な藝術家パーロウの一回の演奏はエレンケイが生涯を通じての著述よりも雄辯に女性の爲め萬丈の氣焰を吐くものである。パーロウを聽かずして女性を云々しようとするものは、ユングフラウの高峯を仰かずして、山の高さを論ふ徒輩である。

帝國ホテルに於けるバッハの『シャコンヌ』の演奏の如き、又帝劇に於ける四日目のシュトラウスの奏鳴曲の演奏の如きは、我邦に於けるヴイオリン演奏史上特筆大書さるべきものである。丼エータン、パガニーニ、チャイコフスキー、丼ーニアフスキーの競奏曲の偉大は云ふ迄もなく、ヘンデルの奏鳴曲の典雅も、ブラームス、ヨアキムの匈牙利亞舞曲、サラサーテの『ジプシーの歌』の豪放、不羈も、ブリッジの『常動曲（モルトペルペトウオ）』ポッパー・アウアーの『績ぎ歌』の燦然として五彩陸離たる光輝も、ショパンの『夜想曲（ノクテユルヌ）』の絶妙（エスクイジット）なデリケッツァも、到底之を同一の藝術家に合せて見出すことを期待することは出來ないものである。クライスラーかコッィアンが來ればよし、さもなければ再び斯のやうな大藝術家の神伎に接することは恐らくないであらう。

伴奏のフリント氏は能く其止る處を知る明を有する人である。伴奏をし、合奏をする者は氏に學ぶべきものが多くあるであらう。

十月十四日

一、第四競奏曲、ニ短調、作品三十一、丼エータン、
アンダンテ、アダージオ、レリジオーゾ、終曲マルツィアーレ。
二、奏鳴曲、惡魔のトゥリル……………タルティーニ
三、甲、伯希來の祈禱……………アクロン
乙、旋轉曲……………モーツァルト
丙、ラ　ギタナ……………クライスラー
丁、匈牙利亞舞曲……………ブラームス－ヨアキム
四、甲、印度人の嘆き……………ドゥヴルジャーク
乙、杜　鵑……………ダキン－マーネン
丙、ツイゴイネルの歌……………サラサーテ

十月十五日

一、競奏曲、ニ長調、作品三十……………チャイコフスキー
第一樂章アルレグロ　モデラート

キャスリーン パーロウ女史を聴く

牛山充

聲樂、舞踊、演劇中の或る方面の如く、是非とも女性の力を俟つものを除き、藝術の他の部門に從事する婦人は、如何に偉大であつても婦人であるからと云ふので兎角蔑視される傾向がある。又事實から云つても婦人の藝術家は、畫家であらうと、彫刻家であらうと、詩人、又は文學者であらうと、我は作曲家、若しくは演奏家であらうと、多くは男性の同等に評判される藝術家に比して稍遜色があるのが常である。從つて婦人としては第一であらうと云ふやうな批評が多くの場合正鵠を得たものとなる。ところがキャスリーン パーロウに在つては婦人として世界第一と云ふ必要は無い。男子の中にも、女史に匹敵する理解と技巧とを兼備するものは殆んどあるまいとすら思はれる。官感的の美の外に多くを誇り得ないエルマンに比し、數段の高さに立つてゐる。力と深みとは云ふ迄もなく、技巧の完璧に就いて云つてもヴィムバリストと伯仲の間に在り、多くの點に於て後者を凌駕しさへする。喫烟と飲酒とが、齎らす恐ろしい害毒に煩はされない、あの無限に纖細微妙を極める絶妙の神伎の如きはたゞ驚異と云ふより外はない。

一般の姉妹藝術、殊に詩文及び繪畫等の教養を缺く、他の指先きの女の名手とは其選を異にし、英文學は云ふ迄もなく、佛伊其他の大陸文學に於ける博大なる渉獵、殊に歴史及び偉人の傳記に對する熱愛が女史の藝術をして大ならしめてゐる貢献は見逃す可らざるものである。婦人なるがために女史の藝術の大を認め得ない者は、女史の名が露西亞名のバルロフでなく、伊太利亞名のバルロ

華麗な着物を着て
自働車や否自働車はそれでも少しはいゝが
人力車に乘つてノコノ〳〵やつて來る。
人間を馬や牛だと思ふ高慢なブルヂョア連中に
どうして眞の音樂が解し得られよう。
彼等は精神の糧として音樂をきゝに
音樂會に行くと云ふ事より
寧ろ物質的な自已を見せびらかしの爲が多いだらう。

オ前達は大切な藝術まで
有産者の所有にさせるつもりか？
ア、可哀相な現代の藝術家よ
確にお前達の魂は墮落してゐる。
お前達の藝術の先祖は
決してさうではなかつだらうに！

お前達が現在立派に生きてゐるのは誰のお蔭だ
無産者の勞働した汗のお蔭ではないか？

お前達は惠しらずではないか？
お前達が彼等の憐れな群衆の爲めに
一度か二度奏いたり唱つたりしてやるのに
なにが勞力がいる事があるんだ』と。
蟋蟀は少しも休まずに鳴いてゐる。
毎晩彼等はなんの爲めに
アンナニ悲して泣くのだらう？
疲れもしないが不思議だ。

色々な愚かな思想に圍まれて
自分は再び何時眠りに入つたか
少しも解らなかつた。

一九二二、一〇、一二

或る夜半に

卜木愛園

私は夜半にふと眼覺め
さまざまな思想に襲はれてゐた
夜は無言に沈默してゐた
音としては哀切なる
蟋蟀の音樂しか
なにもきこえなかつた。

兄はたま〳〵苦しさうな
溜息を吐いて靜かに眠つてゐた
兄は屹度なにか苦しい夢でも
見ていやしないかと私は思つた。

兄が急に私の方に
顔を向けて呻吟（うな）つた時は
まるで私を眺めてから叫ぶらしかつた
『お前達所謂る藝術家よ！
有産階級（ブルチョアー）の享樂の奴隷よ！
お前達は自分の大事な藝術を
なぜブルヂョアの享樂に任せるのだ。
アノ精神的にも物質的にも飢ゑて〳〵ゐる
無産者の前に立つて唱つたり
奏いたりしてやるがよい。
彼等は飢ゑてゐる群れだ
心一パイ喜ぶだらう。
内心から感謝するだらう。
そこで初めてお前達の音樂も光り輝くだらう。
お前達は藝術家の癖（クセ）にそれ程鈍感なのか？
彼等の無我無中に喜ぶ顔を想像出來ないのか、

華やかに漲り溢れ
溶けなごむ一つ心の醉ひしれ
戀の驕樂もありしよと
思ひ出の怡しさに笑みますや。

二

夕雲は灰ばみ沈む、
君やいかに、
やがて此の熱き思ひも
冷やかにさめゆきて
遠離れ二つ所になげくべき
戀の破滅のあらずやと
想ふ不安に泣きますや。

痛　傷

花うるはしき葉のかげに
蕀はかくれて指を刺し、

なよび袂の紅に
蛇はひそみて胸咀まむ。

つゝみよそへる虛僞を
戀と笑ふもしばしにて、
疼痛止まざる心奥の
深傷は癒へじ永久に。

苦　惱

逢瀨の笑ひに愛は深み
別れの淚に思ひは增す
身こそ苦惱に涸れゆけど
胸の炎はつのるのみ。

かよわ心の今はゝや
得たへぬまでになりぬれど
此苦惱はた消ゆべくば
ゆめたよらじな神の御手。

戀の苦惱ぞ世のつねの
快樂にまされ！　求めんや
悊じ『さとり』の寂しさを。

それやいのちか、憂き戀を
泣かん幸にし生くる身に
愛は神より大いなり。

戀のうた（其の四）

内海信之

我が戀

一

我が戀は
ダンテ　プラトン純眞の
聖愛に倣ひ得ず、
いつしかも肉の香に
溺れみだるゝ卑しさ。

二

我が戀は
ゲーテ、バイロン奔放の
狂熱を追ひも得ず
ともすれば世を憚りて
ためらひ惑ふ怯さ。

初戀

みづからにさへ怪しきまで
人なつかしき物思ひ。
生れて知らぬ大いなる
謎は心にわだかまる。

なさけに生くる乙子女の
思慧にはあまる大き謎。
おのづと解けん時やいつ、
しづかに解かん人や誰れ。

君やいかに

一

夕日いま燃へてかゞやく。
君やいかに、
かつて此の若きなさけの

十月白蝶

永田龍雄

十月のかれし草生にひるたけてとぶ白蝶のかげ寂しかり

おのれらもかゝるはかなき白蝶かとびのあはれに消えゆくものか

白蝶のひとつかと見ればまたひとついづこゆか來て日をたのしめり

ぬくき日の翳りそむればいづこにかはかなくてあらむ秋の白蝶

蓬生のいたもあれつゝ枯れがれに小さき蝶の舞ひ居るあはれ

蓬生のあけたるなかに晝雀いくつもいくつも遊びほけてゐる

彼岸中日

まつり日のけふよくはれてうれしくも碧澄む室をあふぎたりけり

うすむらさき露けき花をほとけにとあかとき剪らすはゝそばのかげ

ちゝのみの父のほとけにくゆらする香のけむりもしづかにぞあがる

高臺眺望

起きいでゝ穿く庭下駄もしめらひとこの朝の下町霧がくれ見ゆ

妹がとはの　生命にそへて　わがとはの　生命さかえむ
　妹よ安かれ。

○

めぐりたつ　山の一つの　ひそやかの　といきをも　はた　姫神知るか。
音もなく　すぎ行く雲の　さやぎにも　神の小琴は　ひびきて鳴るか。
かぎりなく　靜まれる海　黑黑と　たたふるは何(ナ)ぞ　涙かも　そは。
まさびしさは　我が胸にしむ　鴨すらも　音たてずゆく
　御前(オマヘ)の神浦(カミウラ)。
舟人よ　いたもなゆきそ　音たたば　御神のまがの　かしこからむぞ。
神さふる　しじまをおそり　舟の子は　しばぶきすらも
　えせずかしこむ。
神が守る　神のしじまの　いひもえず　我が胸にしむ
此處に年　終へむ。

○

えにしをば　またつなぎけり　次の世も　その次の世も
　つなぎつながむ。
別るるは　かなしといへども　やがてまた　逢はむさだめぞ　眞幸くあり待て。
あひ見ずて　久にもならば　くやしくも　おほほしからむぞ　涙しきり落つ。
いやはての　バアチョかくこそ　あたたかき　このわが氣息を　な忘れ姫神。

○

別れ路の　峠にたちて　靜まりの　十和田少女に　涙落ちにき。
峠路(タムケヂ)の　山毛欅(ブナ)のこかげに　なきもかね　ふたたび三度
　バアチョ投げにし。
うるはしく　かがやくまみの　はろばろに　我を送るか
　遠ぐもりせる。
ア・リベデルラ　くりかへしくりかへし　ア・リベデルラ
　十和田女とはに　若く榮えよ。

○

妹が心　寒川(ヒヤツコガハ)の淸きから、われ熱川(アツカハ)の　湧きたち流る。
ぬる川の　ぬるきいとはず　淺瀬石(アセイシ)の　淺き心を　妹にたもはなく。

○

黑石は　水淸きところ　美しき　女多きところ　林檎うまかりき。　（壬戌八月廿三日）

底ふかく　祕めし思ひを　人の世に　いひさはぎ出でし醜の臣は誰ぞ。

○

湖の底　だだ千二百尺　我妹子を　わが戀におもふ　深さたれ知る。

十和田女の　涙のあつさ　たたへては　藍色清き　あたたかき湖。

濃き藍に　衣は染みぬ　沖に邊に　たてる白波　くづれては青き。

島島の　崎崎おちず　めぐりゆく　舟のともへに　藍の波　走る。

こき藍を　たたふる大湖　茂山の　樹樹も　大空も　みな藍をとく。

茂山は　あゐをつつめり　大空は　あゐを流せり　湛ふる大湖。

舟人の　かしこまりをる　中の湖の　森かげすごし　波黒くたつ。

神ながら　しげる茂山　神ながら　湛ふる藍と　映りいそばふ。

垣山は　しげりにしげり　大湖は　湛へにたたへ　大空に居り。

茂山は　大湖にひたり　大湖は　茂山うかべ　藍　日に深し。

○

十和田女の　まみの清きよ　清けども　冷かならぬ　それがともしさ。（湖水不冷常温攝氏四度）

いにしへの　もゆるおもひを　底深く　つつみ居ればかこほらぬ中の湖。

むかしせし　ごとくも妹の　胸にふれば　けだしかへるか　善き生命の。

妹が胸に　いだかれむ時　千億の　天つがくの音　國土ゆすらひ。

妹が持つ　胸のひびきと　わがむねの　ひびきとあはむわが歌成る時。

我妹子の　アルタのひびき　我が胸の　バツソのひびき天地もあへり。

かがやきは　ふたたび滿たむ　我がいきの　妹が御髪に觸れむその時。

和田の底　深き宮居に　われをゐて　行きも見しめよ常春の宮。

妹がむねに　いだかれむ時　常春と　歌人われの　いのちはさかえむ。

のなみだか。

〇

おいらせの　少女ことごと　ふるひたち　つかるるわれに　バンダ（樂軍）かなでつ。

瀧のバンダ　君ヂレットリイチエ　いさましく　川床山も　鳴りも搖るがせ。（銚子の口の瀧、河底陷設して成る）

〇

白ぎぬの　廣機ぎぬを　日ごと夜ごと　織りも下すか山路てりつつ。

銚子（サシナベ）の　口より出づる　十和田女の　生命の流れ　あまりををしき。（サシナべ古語）

〇

相思ふ　こころわすれねば　ゑむまみの　われにかがやくか　十和田姫神。（水湖）

前生（ゼンシヤウ）の　われの心に　しみ入りし　姫神見れば　わがこころ和ぐ。

あひてわかれ　別れてはあひし　幾生（イクシヤウ）の　悔しきざだめ妹はかつ知るか。

その波の　穩かにしも　その底の　深きは知らむ　劫初（ゴウシヨ）このかた。

別れては　劫初このかた　こひ思ひし　みちのく少女さきくいましけり。

いにしへに　黒髮い觸れ　みだれあひし　なほ忘れずや十和田の姫神。

ロづけの　あともまだ殘る　十和田の女　三千生（サンゼンシヤウ）は　はた近かりき。（舊噴火口に丹崖の千丈幕といふあり）

こひこひて　三千生を　こひこひて　今日遂に逢ふ　漏雨の如し。

〇

成劫（ジヤウゴウ）の　劫（コウ）の初めより　うるはしく　しづまりいますこれのひめ神。

君とわが　いそばひあひし　若き日を　君はこひずやもいそばひあひし日。（火噴）

底深く　思ひをば祕め　若き日に　相狂へりし　われをまつとや。

ゑみまけて　人をこひつつ　待ち待ちし　幾年のこころ今日しも語らひ。

〇

千早振　荒ぶる神と　ひたぶるに　かしこまりをりき二千五百年。

たたなはる　青垣山の　たゞ中に　しづまりいます　かなしさ姫神。

みちのおくの　こきばく山の　茂る木の　青垣山ごもれる　うつくし蔦の湯。
人ごゑは　此の山にせず　風がゆく　茂樹の音に　雲の走る見る。
わが心　安みたらへり　人も世も　我が身のさちも　ものにしもあらず。

○

相見れば　こゝろ落居つ　わが戀ふる　奥入瀬少女(川)　ゑみやはらげり。
手携はり　いむつれゆきて　子之口(ネノクチ)に(地名)　今宵かたらむ　歌はあはせむ。
眞日つよき　夏の光りは　君と行く　この山かげに　照らずたのしき。(坦々たる大道、深林中を川にそひてゆく)
夏山の　しげきが山の　山下の　もりのふる森　日もさずけり。
古森の　したみちたのし　水とあはせ　風とあはせて　我が胸ひびき。
我が胸の　とどろ鳴るとき　十和田女(川)　の　清きいぶきの　我にを觸るる。
十和田女よ　しかもなおどり　しまらくは　淀みてゆかむ　我が胸によれ。

君うたへ　ソプラアノ歌へ　風の音は　アルトなるべし
　われはバリイトノ。
たきのおとは　バッソにひびく　山の鳥メッゾソプラアノ
　來てもあはせよ。
もだありて　しばらくおもへ　妹(川)　とわれと　いかに相見し　いかにわかるる。
うれしくば　うれしとさはぎ　かなしけば　かなしとなげく　少女わがさが。
わかるるの　悲しみ知らば　せめて今　おどりもうたへ
　あへる時にだに。
歌聲を　こだまにあげよ　歌人と　陸奥(ミチノク)の女(メ)と　逢へる知らさむ。

○

小阿修羅　大阿修羅王　たけび怒り　軸も摧けよと　相搏ちたたかふ。(修羅の瀧)
修羅のたけび　何故に起る　此の潭の　靜かに澄める　おだやかさから。
おだやかに　見ゆるたちまち　たけびたつ　人の世に似るか　修羅のせのたき。

○

向崖の　音無し小瀧　人知れず　こひになやめる　少女

十和田泛游

林　古　溪

みちのくの　上北(カミキタ)ひろ野　牧母馬(かふ)の　いななきもなし
廣野眞日照る。
上北の　廣野たひら野　ゆきゆけど　眞日照るみちの
ひろ野平ら野。
並みたてる　木の下ゆけば　溝深く　牛かひの子の　牛
洗ひ居り。

○

みちのくの　すぐぢ平ら路　ゆきよけど　妹もし來ねば
　まうらさびしき。
目くるめき　眞日てる長路　人も逢はず　風もそよがず
　長路眞日照る。
なつかしめ　わがする川の　奥入瀬(オイラセ)の　淸きがなかに
馬あそび居り。

○

下野の　那須野さきゆく　那珂川の　岸のくず花　さな
がらに見ゆ。

まじものの　わなにかかりし　いにしへの　ゆめの大野
の　那須野おもほゆ。
なつかしき　奥入瀬(オイラセ)川の　川波に　ふれてをゆかな　人
はとがむとも。

○

斧かつて　來ざりし森の　古森の　茂樹(シゲキ)がしたの　小暗
き此の道。
小暗くも　さびしきみちに　ふとあひし　やさしきまみ
の　牛の親と子と。
さびしさに　え堪へずなりぬ　聲あげて　うたへば更に
　さびしさのます。
何といふ　鳥にかあらむ　近く來て　珍しき聲に　山び
ことよもす。
梶(カヂ)の實は　さはに落ちてあり　吾妹子の　家づと請はば
　これを示さむ。

○

忙し相に、炊事場から姿を見せたり隱したりしてゐたが、たとへその男の前を通ることがあつても優しい言葉の一つさへ懸けようとはしなかつた。お茶の一杯を彼に與へるでもなかつた。

滿は梯子段の上からその樣子をつく〴〵眺めてゐたが、急に可愛相な感じが湧き上つて來て、幾らか惠んで遣らうと思ひ乍ら湯上り衣の袂を搜して見た。幸ひ袂には十錢の紙幣が二枚あつたので、梯子を降りて行つてそれをその男に渡した。するとその男は稍明るい顏付きで再三禮意を述べた。間もなくその紙幣は、その男のかなり大きな財布の中に納められた。その時滿は、そつと、その財布の底を覗き込んだが、十錢紙幣が四五枚とその他銅貨が少しより這入つてゐなかつた。

やがて歸り支度を終つたその男は、再び彼の前に頭を下げ淋しい笑ひを殘し乍ら力の無い足取りで、午後の太陽の直射する戸外へ出て行つた。（大正十一年八月十七日）

らお菓子を入れた硝子製の器とが、三角形に置き陳べられてあつた。巡査は音樂を聽き乍ら、時々菓子を撮んでは茶を飮むのだつた。十三絃琴の彈手の男は、側に巡査が居るので、稍ゝ堅くなつて彈いてゐるらしく見えた。やがて一曲を奏で終つたが、誰一人として一錢の銅貨さへ惠む者はなかつた。その男が彈く手を止めて、腰からタオルを取り乍ら額の汗を拭ふてゐると、一番戸口に近い場所に立つてゐた三十格好の男が笑ひ乍ら、『何か一つ艶つぽいものをやつてくれないか』と粗暴な聲で云つた。

すると彈手の男は力無い聲で宜しうがす――と返事をしてから、琴の調子を改めて彈き始めた。滿には、それが何と云ふ曲であるかは解らなかつたが餘り面白いものではなかつた。

白髮の巡査は、二度目の曲が始まると間もなく、宿の女主人に、ぺこ〳〵頭を下げて出て行つた。

滿は二番目の曲の終る迄梯子段の降り口の處に佇んで聞いてゐたが、詰らなくなると時折視線を階下の其男の上に向け乍ら、――何故あの男は、あんな、丈夫な體格をし乍ら、あんな詰らない乞食みたいな仕事をしてゐるだらう……一體あんな商賣してゐて飯が食つて行けるものかしら――斯んなこと考へたりした。その瞬間彼の頭に、彼が嘗て小學生時代に讀本で習つたあのウィスナの可愛相な辻音樂師のことが浮んだ。それと一緒に辻音樂師を不憫に思つて自ら彼の貧弱な樂器を握つて助けて遣つたと云ふ佛蘭西の音樂家アレクサンドル　ブーシェーのことが……然しその男の丈夫相な太陽に燒けた顏色を見るとそんな考へが次第に薄らいで終ひには消えて了つた。彼が何やらの艶物語りを彈き終つた頃は、彼の周圍に一人も人影がなかつた。彼に艶物語りを彈く樣にと要求した男さへも……宿の女中は

時々背中の金色を帶びた蠅が、彼の皺の多い額や鼻の尖端や頬の邊りに止つて這ひ廻る樣なことでもあると彼は骨節の太い手を差し延べて、無意識的にそれを追ひ拂ふのであつた。然し蠅は一旦逃げ去つても直ぐまた飛んで來て彼の睡眠を妨害した。彼れ此れ廿分も經過したと思ふ頃矢張蠅の爲めに彼は眼を醒した。彼が、腹立たしい氣持ちで、――うるさい奴だなあ――と呟き乍ら半身を起した時、旣に蠅は向側の壁に飛び移つてゐてさも彼に對して謝罪してゐるかの樣に、忙し氣に前の兩脚を動かしてゐた。その格好が餘りに滑稽だつたので滿は思はず苦笑した。

戶外では蟬の聲が騷々しかつた。午後の太陽は座敷の眞中頃迄差し込んでゐて、室內は燃える樣に熱かつた。

丁度その時の事だ。突然階下から輕快な明るい金屬製の何やらの絃樂器の音が涼しく響いて來たのは……此んな淋しい（彼が來てから只一度も三味線の音さへ聞いたことがなかつた）溫泉場には、實際珍らしかつた。何でも階下の上り口に腰を掛けて彈じてゐるらしかつた。滿は好奇心から急に立ち上つて、いか〳〵梯子段の處まで進み寄り稍腰を曲げて下を覗き込んだ。すると梯子段の昇り口に立派な八字髯を蓄へた四十五六の男が所々壞れかゝつた十三絃琴を膝の上に置き、何やら、ぶつきらぼうな聲で歌ひ乍ら彈いてゐるのが彼の眼に映つた。

彼の周圍には、宿の女中や二三の男達が或る者は立ち他の者は板敷（梯子段の直ぐ下の處に板になつてゐた）に腰を懸けて稍熱心に耳を傾けてゐた。その中には、溫泉宿を取締る爲めに時々遣つて來る六十近い白髮の巡査も混つてゐた。そして、その巡査の前には茶を入れてある土瓶や茶碗や、何や

彼はこれ迄幾度か思ひ悩んだのだ。然し思案の結果は何時も藝術に身を捧げることに決心するのであつた。

實際現在の彼の境遇は、彼の目的にとつて非常に不利益だつた。けれども彼は良くそれ等を忍んで努力するのであつたが矢つ張りそれは無理でもあり駄目なことでもあつた。切角書き始めても子供に妨げられたり家庭の色々な雜事に頭を費したりして、まとまつた事が出來なかつた。彼の妻は時々、彼が家の事や子供に對して冷淡過ぎると云ふ不平や小言を幾度か漏らした。そんな時彼は、急に苛立つて今迄書いてゐた原稿紙を恐ろしい腹立たしさで、ずた／＼に裂き破ることさへあつた。それ許りではない、彼が、親を援助する一法として末の弟を呼び寄せたのが誤りで、それ以來彼と彼女との間に、弟の問題が原因となつて、よく口論が始るのだつた。最初の中は、それ程でもなかつたが、屢々回數を重ねるに從つて、お互ひの間に、冷やかな隙が生じ、次第に家庭の空氣が面白くなつて來た。さう云ふ事柄は若い彼の魂をどの位ゐ傷けたか知れない。それが爲めに彼は幾度か頭を悩ましたのだ。――斯んな面白くない生活を生活しなければならない様になつたのも親を援けよふとして末の弟を呼んだがらだ。呼びさへしなければ、斯んなに速く秋風の吹く様な冷く淋しい生活が我々を見舞はなかつたに違ひない。――彼は時々斯んなこと思つては、腹の底から湧き出る様な大きな溜息を吐くのであつた。

床の間の方に頭を向けて、ぼんやり天井の節穴を眺め乍ら、自分の境遇や身邊に就ての色々な事柄を考へてゐた滿は何時の間にか眠氣を催し始めた。間もなく彼の部屋から微かな寢息が漏れて來た。

ることだらう——斯う思ふと滿は堪らなく嫉ましかつた。さうして自分一人だけがぽつねんと、まるで人々から置き去りにされたかの樣に、殺風景な部屋の眞中に寢轉んでゐると云ふことが彼の心を非常に淋しくさせた。滿は悲哀と寂寥とを一緒にした感じを心の中に、ひしひしと味ひ乍ら、視線を室内の周圍に向けた。黑味がかつた藍色の壁は一層暑い感じを催させてゐた。正面の床の壁には、木板刷の拙い鐘鬼の掛軸が懸つてゐた。床の間の上に置かれてあるトランクも、その傍らに積み重ねてあるドストエフスキーやツルゲーネフやその他二三冊の創作書も淋しく沈默してゐた。全心が云ひ知れぬ寂しさで捕へられてゐる眼には周圍の全てが同じ樣に物淋しく映るのであつた。さうしてさういふ周圍が動ともすれば彼の心を際涯なく深い冷やかな暗闇へ誘導し勝ちだつた。——あゝ矢つ張り俺と云ふ人間は人一倍孤獨と云ふものに對して寂しさを感じるのだが、その寂しさと鬪ひ乍ら全ての煩雜な關係を絶つて、眞の孤獨の境遇に居るのでなければ自己の進むべき道の開拓も創作も出來ないのだ——と、時々彼は斯んなことを考へたりした。

事實、近頃滿の頭を占領してゐる唯一の願望は、家庭生活の束縛と其他血族上の諸係累——親を助け弟や妹の世話をすること——から一時的に解放され自由な孤獨の身になつて、思ふ存分自己を築き上げ、自己を藝術に沒頭させ度いと云ふのであつた。彼は、この自分の願望が餘りに蟲が良過ぎると云ふことを、よくよく知つてはゐたが、さうかといつて何時迄も現在の樣な不利益な生活を續けてゐては、年と共に自己が破滅して行く、つまり自己の藝術が何等開拓されることなしに一歩一歩死に接近して行くと云ふのも明らかな事實なので何れかを犧牲にしなければならなかつた。この問題に就て

彼は思ひつ切り大きな欠びをして、視線を戸外に移した。火の塊の様な大陽は、かん〳〵と、恰も下界に在る總ての物を强烈な熱で焼き盡さずには措かないと云ふ様に照つてゐた。彼は起き上つて縁側の欄干の前に立つた。

前の山の頂きの上には、物凄い程巨大な、稍灰色を帶びた綿雲が、今にも爆裂し相な、恐ろしい勢で、もく〳〵と現れてゐた。そして何時迄それを眺めてゐても、元の形の儘で、ちつとも變化しなかつた。風は全く凪ぎ、前の庭に、によつきり立つてゐる可なり幹の太いポプラの葉は、まるで死んだかの様に微動さへせず靜止してゐた。

満の起居してゐる部屋は、宿では上等な方だが、然し朝から晩まで太陽の光線が差し込むので暑苦るしかつた。そればかりではない直ぐ下は炊事場の屋根になつてゐて、その上に置かれてゐる瓦からは、一旦受けた熱が室内に反射して、日中で最も暑さの烈しい正午から一時二時頃迄の間ときたら、とても呼吸苦るしくつて我慢も何もならなかつた。満は毎日、その時刻が遣つて來ると、全然弱り切つて了つて、自分で自分の體の處置に窮した擧句は、たゞ幾度となく力の無い嘆聲を漏らすばかりであつた。實際そんな時の彼は彼の最も好きな文學書を讀むことも音樂を奏することも嫌になつてにがり切つた顔をし乍ら室内の彼方此方と比較的樂な氣持のする位置を選んで轉げ廻るのだつた。そして、少しでも其の暑苦るしさから遁れ度い爲めに無理に眠らうとするのであるが、平常晝寢の癖を附けてゐない彼は、幾ら努めても眠ることが出來なかつた。

温泉宿の眞晝時は極めて靜かだつた。―― 他のお客達は皆んな今頃安らかな晝寢の夢路を辿つてゐ

スに達した時に於ては、ドン　ファンが、ずつとフリーな會話體を持つ事にしましたので、盛に對句を使ひました。餘り多すぎては、きざですけれ共少し位は感情の昇騰を表現するのを助けるだらうと思ひます。それで二人の女を比べた所の動詞は、盡く『そつくりです』の一てんばりとしました。成可く日本語に近い樣にと心掛けましたので少々原文を無視した所もあります。それから人稱はすつかり彼及彼女或は彼等を取つて了ひました。戀人への名稱は『あの人』と云ふ言葉を用ひました。ほんとに夢の樣な人と思はずリズムを持つてゐる樣に思ひましたから、ドン　ファンのセリフ中二三の卑猥な言葉もありますが激情の頂點にあつて相手に手つ取り早く知らせたいと思ふ彼の心理狀態を參酌してゞあります。

（一一年八月京都にて）

溫泉宿の眞晝時

相澤晃

眞晝時だ。

『やあ！また遠慮なく遣つて來たなあ……日中で一番暑い時刻が……』

狹苦るしい座敷の眞中に、枕を持ち出して、仰向けに寢轉び乍ら古臭い婦人雜誌――それは宿屋のもので、多分湯治客が忘れたか、それとも故意と不必要な爲めに殘して行つたのかの何れかであらうが、とてもお話にならない位ゐ汚くなつたものだ――を、退屈紛れに、而かも何か斯う恐ろしく不潔なものに觸れる樣な手付きで、ページの彼方此方を繰つて拾ひ讀みしてゐた滿は、急に手にしてゐた其の汚らしい古雜誌を、ばたりと傍らの疊の上に投げ棄てゝ斯う獨語した。

どうか遮ぎらずにおき下さいまし。—— 私はあなたに心中の望みをうち明けた時に、又あなたが何から何まであの人にそつくりだと云ふ事をお話した時に、あなたはすつかりお分り下さつたものと思つてゐました。併し私は氣が狂つて居りました。それは私はまだ許されて居なかつたのです。ではもう一度同じ事をきいて下さい。ルカスタさん。お優しい、愛らしいルカスタさん。私はあなたを愛してゐます。私は火の如き激情を以てあなたを愛してゐます。あなたの前には私の手も、私の生命も、私の財産もすつかり提供致します』。

ルカスタ『どうぞお立ち下さい。ひざまづく人は大嫌ひよ。そんな事をすると馬鹿に見えるから。之以上おふざけなさるなら、私は二階へ上つちまふわ』。

ドン　ファン（立ち上つて）『ぢやあなたはもう私がお願ひしてはいけないつておつしやるのですか？』

ルカスタ（大聲でふき出し乍ら）『御免（メン）なさい。でも私にはどうにも仕様がないもの』。

ドン　ファン『實際笑戯事ではありません。（彼は劒をぬく）私は自殺し様としてるんです。』

ルカスタ（尚も大笑の叫びを止めずに）『馬鹿げた事はおよしなさいよ。まあ考へて御覽なさいな。あなたは私のお父さんよりも年寄りぢやないの。私のお母さんはこゝにゐてよ』。

ウェセックの伯爵夫人登場。端麗なる婦人にて非常に丁寧に頭を下げる。

ルカスタ（彼女の母に向つて獨白（ヒトリセリフ））『おゝこの人隨分いたずらつ兒よ』。

（彼女は大笑を靜めつゝ走り去る。）

幕

譯者註　此戯曲の全體のスタイルは、ルカスタの方を出來るだけお轉婆らしい快活な調子を持たせましたので、多少言葉も、ぞんざいです。ドン ファンの方は、ずつと調子をおとして哀願的態度を髣髴させるために極めて丁寧な言葉を使ふ樣に致しました。聲の高低の方から云ふと調子がいゝ樣に思ひます。早口なかん高い、はしやいだ聲の後から莊重な重みのある言葉が、その間を響く事になつて、さうした言葉の調子は實演した時の戯（ゲキ）的效果を一層増させるだらうと思ひます。併し眞中頃の事件のクライマック

娘なら、あなたの様な貴族に思はれた事を知つたら、よろこぶと思ふわ』。

ドン　ファン『併しあなたは私が年寄りだとおつしやいましたね』。

ルカスタ『あら、そんな積りで云つたんぢやないつて先程も云つたぢやないの。あなたは一人前の立派な男で、フィリップの様な學生ぢやないと云つたばかりだわ』。

ドン　ファン『それでは乙女は私を滿更ら嫌ひではないとあなたはお思召しなさらんですか？』

ルカスタ『エヽ〳〵たしかに』。

ドン　ファン『たとひあの人の心が鐵石の樣に堅くつたつて、私があの人に私の心中を打ち明けさへしたら、あの人を柔らげて私のものにする事が出來ると思ひます。それが私の望む又さいたい凡てです』。

ルカスタ『私はすぐその人に話して上げるわ、あなたの代りに。娘さん達きつと羞しがつてよ。(彼女は赧くなる)

ドン　ファン『そんな事をなさると、又私の心を他の恐怖がなやませます。あの人には、もう既に許嫁があるかも知れません。あの人の心は私を見放してゐるかも知れません』。

ルカスタ『私達の田舍の娘だとしたら、そんな筈はないわ。あの人達はみんな若いんだもの、ダイアネメの外は皆結婚して了つてゐるのよ。その上あの人はお化けの樣だもの。まさかそんな人ぢやないわネ』。

ドン　ファン『私は大膽にやつていゝでせうか？』

ルカスタ（彼女の兩手をハタと打ち乍ら）『エ、〳〵思ひきり大膽に!!』

（ドン　ファンはルカスタを捕へて彼女に接吻を注がうとしてみせる。彼女は嚴肅な態度を以て彼の耳を打つ）。

ルカスタ『まあ、こんないたずらをして、どうしようといふの？私はあたが紳士で、貴族だと思つてゐるのに』。

ドン　ファン（ひざまづいて）『お許し下さい。あなたが既に御了解下さつたと思つてゐました御推測下すつたに違ひないと思つてゐました。――

くりです。大空の輝きと、夏の海の深さを持つてゐます。あの人の鼻も、あなたにそつくりです。鼻すじの高くてよく通つたそして花の様にデリケエートなんです。あの人の唇もあなたにそつくりです。どんなに熟した櫻實(サクランボ)だつて、どんなに深紅(マツカ)なバラだつて、ルビーだつて恥ぢ恐れる程紅くて美しいのです。そしてあの人の歯も、あなたにそつくりです。それは東の國々の眞珠をもあざむく程立派な歯並みです。あの人は、あなたの様な風采で、立居振舞もあなたの様にしとやかで、釣合つてゐます。頭もあなたの様に、ふさはしい平均を保つて居ります。而してあなたのお姿の様に清淨な輪廓を描いてゐます。あの人が、ほゝ笑む時はあなたが微笑んだ時の様に一種の輝きさへ發する様です。又あなたが話す時にきく様な、爽快なメロディーを聞く事が出來ます』。

ルカスタ『まあ、そんなに美しい方と比べて下さるなんて隨分恥かしいわ』。

ドン　ファン『私は、あの人にあなたを比べては居ません。私はあなたに、あの人を比べてゐるんです。今朝まで私はこんな美人が世の中にゐよう等とは、夢にも思ひませんでした』。

ルカスタ『あなたは初めて今朝その人を御覧なすつたの？』

ドン　ファン『さうです。今朝だつたんです。今日は私に取つて、此世が天國と地獄の間に懸けられためまいのする梯子に變つた運命の日の様な氣が致します』。

ルカスタ『アヽ、わかつた。おとなりのエレクトラ　ハリントンだわ、きつと此處へ來る途中、あなたが出會つたんでせう』。

ドン　ファン『それはエレクトラ　ハリントンではありませんでした。エレクトラ　ハリントンは私の内々思つてゐる女神に比べたら、皺の寄つた鬼婆です。私は私の目的を話したつていゝでせうか？どうでせう？私の願ひが一分(イチブ)でも、あの人に受け容れられる隙(スキ)があるでせうか？ね、どうでせう？』

ルカスタ『何故？いゝぢやないの。誰だつて若い

です。その戀情はまるで猛烈な熱病の樣に、私の心の中に燃えて居ります。併し、私は敢へてそれを告げませんでした。私の淸い尊いその人は私の內に、もえてゐる氣も狂ひさうな有樣を思ひやつてはくれないのです。私の情熱を省みて吳れないのです』。

ルカスタ『何故そのひとへお告げにならないの?』

ドン　ファン『アヽ!! 告げたいのは山々なんです。けれ共告げたゝめに、あの人の御機嫌を損じたら、あの人はいゝ返事を、きかうとあせつて、だしぬけに云ひ寄つたために、最初に私の得がたい機會を臺(ダイ)なしにしてしまう樣な事があつたら、又私が餘り急いで云つたゝめに、永久に私の希望を失ふ樣な事にでもなつたら、あゝ!! その時はどうしたらいゝでせう』。

ルカスタ『その人はそんなに若いの?　こんな事おたづねして隨分失禮だわネ』。

ドン　ファン『いゝえ、決して失禮ではありません。あなたの唇からは、如何なる過失も、もれる事は出來ません。(ルカスタ赤面す) 私はあの人が若い方で、たつた一度あの人を見たと云ふ事を御話し致します』。

ルカスタ『其時それが一目惚れだつたの?』

ドン　ファン『さうです。けれ共戀つて言葉は、私をさらつてゆく大きな波を表はすにはまだ〱弱い言葉です』。

ルカスタ『世間では云ふわ、一目惚れの戀は、どちらも心があるんですつて』。

ドン　ファン『お互にさうだつたら、どんなにいい事でせう。併し、あの人は私のうれしい併し乍ら痛々しい祕密を推測して吳れたでせうか? あの人は、ほんとに若くて無邪氣なんです』。

ルカスタ『その人は色が黑いの、それとも白いの?』

ドン　ファン『あの人の毛は、あなたにそつくりです。お日樣がキラ〱輝いてゐる樣です、そしてあなたの額を包んでゐる樣な美しい色合ひと、ゆたかな卷き毛をもつてゐます。あの人の肌もあなたにそつくりです。朝の露に輝いたバラの花の樣です。あの人の眼は、あなたにそつ

ルカスタ『ぢや發見家ね、スペインの方はみんな、お立派な探險家ばかりだもの。』

ドン　ファン『いゝえ、私は只の一度ヨーロッパへ渡つたきりです。それも遊びに。』

ルカスタ『オヤ／＼私は馬鹿だこと。勿論あなたは外交家だわね。』

ドン　ファン『いゝえ、私は單に一般の所謂ゼントルマンなんです。』

ルカスタ『ぢや無職だつておつしやるの？』

ドン　ファン『單なる無職ぢやありません。澤山の仕事をもつてゐますから。』

ルカスタ『併し、どうしてそんなに、時間つぶしばつかりしていらつしやるの？』

ドン　ファン『さうですね、我々スペイン人は、あなた方イギリス人と違つてゐる事を、御承知でせう。吾々は實際的ぢやないんです。もつと、さうですね、——何と云ひますか知ら——また、熱情的で、性急性(セッカチシヨウ)で、ロマンティックなんです。私の様に、スペイン人の貴族は、皆さうした性質をもつて居ります。いゝえ、私共は、美しい御婦人に對して、日々不斷の御奉公と、崇拜とを表はすために、命も靈も知識をも捧げる高尚な仕事の外、どんなものも無價値だと思つてゐるのです。』

ルカスタ『オヽ。わかつたわ、あなたは結婚の約束をしていらつしやるんだわ。』

ドン　ファン『いゝえ、どうして!!』

ルカスタ『ぢあ、あなたは結婚に必要なお金がないの？』

ドン　ファン『それぢやないのです。金は相當に持つて居ります。』

ルカスタ『ぢあね、その方の御兩親に斷はられたんでせう。』

ドン　ファン『私は、まだきいてもゐないのです』。

ルカスタ『あたし、あなたの御成功を祈つてよ』。

ドン　ファン『併し、イギリスの御婦人が一番お上品で、チャーミングだと云ふ事を御存じありませんね。私は戀してゐる事は眞實です。決して途中に情がなくなつたり薄くなつたりする事のない强烈な戀情のために、私の心は狂ひそう

のに私は丁度いゝのです。併し、そんなに年寄りぢやありません、年寄りにお見えになりますか？』

ルカスタ『いゝえ、そんな積りで云つたんぢやないの、私が云つたのはね、あなたは、私の友達に比らべると年寄りだつて云ふのよ。』

ドン　ファン『あなたにはお友達が澤山おありですか？』

ルカスタ『えゝ〳〵どつさりあるの、今年學校出たばかりのハリーさんに、オックスフォードの學生のフィリップさん、それからね、義勇騎兵隊に參加なすつたヴァレンタインさん、さう〳〵、それから一番親しい友達の從兄のディックさんなんか。』

ドン　ファン『ディックさんは、おいくつなんです？』

ルカスタ『半期前に學校を出たばかり。今にフィリップ　シドニーさんの樣な、立派な軍人になるんですつて。』

ドン　ファン『そしてあなたは、彼が大好きなんですか？』

ルカスタ『エヽ、大變――なの、だつてあの人誰よりも、テニスがうまいんだもの、あなたはテニスをなさる？』

ドン　ファン『いゝえ、めつたに致しません。』

ルカスタ『木球遊戲は？』

ドン　ファン『どちらも、めつたに致しません。』

ルカスタ『では、ラウンダーは？』

ドン　ファン『めつたに。碁かカルタの外は何も出來ません。』

ルカスタ『碁や、カルタは室内遊戲よ。私達はそんなものは數に入れないの。從兄のディックは、それは女が遊ぶものだつて。』

ドン　ファン『あなたも御承知の通り、私はその種の事に對しては、ちつとも餘裕を持つて居りません。』

ルカスタ『あなは士官なの？』

ドン　ファン『いゝえ。』

ルカスタ『水兵？』

ドン　ファン『いゝえ、私は海がきらひです。』

馬車を引いてくれるわ。』

ドン　ファン『私は、あなたを運ぶ勇しい馬を、差上げなくつちやなりません。といふのは、きつと、あなた　ダイアナの樣に、よくお乘りになるでせうから。そしたらあなたは、それをドン　ファンとおよび下さい。』

ルカスタ『有難う!!　けれど、私のお母さんはいふの、知らない方から、何かやらうと云はれたつて、決して貰つてはいけないつて。』

ドン　ファン『併し、私は、知らない者ぢやありません。あなたは私を一面識もない者として、お考へになつてはいけません。あなたは、私を一人の友人としてお考へ下さらなければなりません。』

ルカスタ『マークハム夫人は、おつしやつたわ、人はお互に七年間交際しない内は友達と呼ぶ事は出來ないつて。』

ドン　ファン『マークハム夫人つて、どなたですか?』

ルカスタ『私達の家庭教師なの』。

ドン　ファン『そんな人が何を知るもんですか。まあ、おきゝなさい。家庭教師なんて皆馬鹿なものですよ。』

ルカスタ『どうして〱マークハム夫人は馬鹿どころのさわぎぢやないの、何でも知つていらつしやるのよ、それこそギリシャの不規則動詞でも。』

ドン　ファン『でも只一つその方の知らない事があります。』

ルカスタ『それは何なの?』

ドン　ファン『それはね、私達の友情が、どうして始まつて、どんな風に進んで、お互の關係は、どんなものかと云ふ事です。とにかく私はあなたに、お友達になつて下さいつてお願ひする事は出來ないでせうか? ひよつとすると、あなたは私を敵として對していらつしやるんぢやないでせうか?』

ルカスタ『さうね、まあ大した害はないわネ、年とつた人と友達になつたつて。』

ドン　ファン（苦笑して）『あなたとお友達になる

ドン　ファンの失敗

――小戯曲集より――

音川仙三譯

ルカスタ『お母さんは今すぐに下りていらつしやつてよ。お待ちになるのを、おかまひなければ』。

ドン　ファン『えゝ、よろしう御座いますとも、人間であり乍ら女神の様なお方と御一緒なら、百年でも待つて居りませう』。

ルカスタ（顔を赧らめて）『そんなに迄、おつしやつて下さるなんて、隨分御親切ね、だけど、私は今朝大變忙しいのよ。農場へ牛を見廻りに行かなくつちやならないし』。

ドン　ファン『仕合せな牛だなあ。けれど、少し位待たしたつていゝんでせう、そんなに急がなくつたつて、いゝと思ひますが。』

ルカスタ『でも、とつくに時間が過ぎちやつたんだもの、私、人を待たすなんて事大嫌ひ。』

ドン　ファン『何と、あなたは思ひやりのある親切な美しい方なんでせう。他人を待たす事を、お好みにならない方を實は、内々尊敬申してゐます。あなたの美しい快活な御氣性が、よく表れて居ります。きつと、私達はお友達になりませう。私は、もつと前から、あなたとお知合ひの仲だつた様な氣さへ致して居ります』。

ルカスタ『あらまあ!! お名前すら知らないのに。只ね、前から思つてゐた通り、あなたはスペイン貴族なんでせう。』

ドン　ファン（傲然と）『私の名は、恐らく今迄におきゝでいらつしやいませう。私はセビールのドン　ファンなんです。』

ルカスタ『うちの小馬もね、ドン　ファンつて云ふの。年取つて、びつこなんだけれど、子供達の

婚』、『花の眼ざめ』もとりどりに面白い。民衆に清い娯樂を與へる物としては最上のものであらう。

　パヴロヴの獨舞（ソーロ）ではルービンシュタインの『夜』とクライスラーの『水蜻蛉』と、サンーサアンスの『瀕死の白鳥』と、チャイコフスキーの『カリフォルニア『の罌粟』を觀ることが出來た。此中では『罌粟』と『白鳥』とがありありと目に殘つてゐる。ヴリニン氏との二人聯舞（ドユエツト）はどれも面白いとは思へない。男はたゞ女の助手として動いてゐるだけで、音樂に於ける二重奏のやうな重い役目を勤めてはゐない。女を抱きあるいたり、其手を執つて片足で旋回させたりする役が主となつてゐるのでは、聯舞として價値の無いものである。他の人々の二人聯舞も多少此缺點を免れない。若しも男がもつと踊つて、一層密接な有機的の結合をするやうにしたならば定めし面白いものが出來るであらう。

　ヴリーニン氏の『弓の舞』、『ピエロの踊り』と、フリード孃の『アニトラの踊り』はそれぞれ見る可きものであつた。ヴリーニン氏のあの男性的な力強い飛躍と、美しい肉體とは永く瞳底に止るであらう。『秋の木の葉』の中の『菊の花』を踊つたパヴロヴの自作自踊もよかつた。ショパンの幻想即興曲が、女史の天才によつてあれ迄に美しい舞踊的表現を與へられたのを見たならば、『瀕死の白鳥』の作曲家が女史に寄せたと同じ感謝の言葉と賞讃の辭とを惜しまなかつたであらう。

　其他ミンクスの『ボヘミアの舞踊』グロスマンの『匈牙利舞踊』、波蘭土民踊の『オーベルタス』、グリンカの『マヅルカ』等もとりどりに面白いものであつた。『和蘭陀舞踏』の無邪氣な滑稽も罪が無くてよい。

　二十日の長期興行が、單に長さに於て此種のもので空前であつたばかりでなく、我藝術界、殊に舞踊界に與へた刺戟も影響も亦大なるものであつたらうと思ふ。帝劇の山本專務が、我藝苑のために勇を鼓して此冒險を敢てした意氣は寔に壯とすべく、又寔に多とすべきものであると思ふ。此名舞踊家の名と藝術とを或は筆にし、或は口にするに當つては、氏の名も亦ともに記憶さるべきものである。

アンナ　パヴロヴを觀る

牛山充

イサドラ　ダンカン、アンナ　パヴロヴ、カルサヸーナと云ふやうな名は、此島國を離れることの出來ない我々には、永遠に單なる名に過ぎないであらう。寫眞か、繪で其舞姿を想像するに止るであらうと思ひあきらめてゐた。その中の一人なるアンナ　パヴロヴが彌々來るといふことを永田君に聽いた時には、殆んど君の言葉も、自分の耳をも信ずることが出來なかつた。併しそれは彌々實現されて、帝劇の舞臺の上にかねて寫眞で見覺えのあるあの顏を仰いだ時、抑へることの出來ない喜びを感じた。

兎に角第一の稱を有する人である。世界第一の名を有つてゐる人の藝術の大さは果してどの位のものであるか、明らかにそれを自分の目で見きはめることが出來るのだ。我舞樂界の名家、能樂界の巨匠、舞踊界の名人と比べることが出來る。かう思つて私は云ふべからざる喜びを感じた。

パヴロヴは確かに優れた舞踊家である。往々感覺の世界を脱して精神的の世界にはいる瞬間がある。其瞬間には肅然として襟を正させる。勿論今度上演された舞踊全部が、藝術として最高の水準ばかりを示すものではない。あの劇場に集る人々が悉く最高藝術を要するものばかりではないのであるから、此事は少しも怪むには足りないのである。あのプログラムの中で一つか二つ高いところを見せて呉れるものがありさへすれば澤山である。其他のものは幼い子供のやうな心になり、低い一般の人々の世界に下つて、大衆と一緒に喜ぶべきものである。『アマリラ』も『ショパニアーナ』も、又は『靈笛』も『魔の湖』『仙女人形』『波蘭土の結

『常動曲（ペルペトウム・モビーレ）』『舞踏の勸誘』)に據る布衍曲（パラフレーズ）三つ。

演奏會用練習曲二つ(ハ調、變ホ調)、

變ト調觸敲曲、

ヘ調アラベスク、

變ホ調、黄昏の圖（アイン・デムメルングスビルド）、

サラバンド、

クーラント、

小諧謔曲（スケルツイーノ）、其他、

ゴッドフスキーは又ザウアー、ホクマン、イー・エス・ケリー、及びウヰゾーンを編纂員とし、自ら編纂長となつて聖路易で "The Progressive Series of Lessons, Exercises, Studies and Pieces" を出した。

＊　＊　＊　＊　＊

ゴッドスフキーは此春夫人と令息レオ君とを伴つて初めて南米の樂旅に上つた。七月二十二、二十三の兩日コルドバで、二十四、二十五の兩日にロザリオで演奏した。ロザリオはブエノス アイレスに次ぐアルヂェンティンの大都市である。其後ブエノス アイレスに復た歸つてオデオン座で再度二三の演奏會に出演し、ウルガイのモンテギデオで演奏してから、智利のサンティアゴとヴルパライソに向つて出發する筈であつた。

八月には南下しリオ デジャネロで八回演奏し、パーロ其他ブラジルの諸都市で演奏する筈であつた。定めし到る處で赫々たる捷利を收めたことであらうと思ふ。七月十九日付けでブエノス アイレスから友人に寄せた手紙では十月末でなければ合衆國には歸れまいと書いてゐる。多分九月に行はれるブラジルの建國百年祭にはあちらに居つたことゝ思はれる。それから一度北亞米利加に寄つて日本へ來たのであらう。南米の風物の變つてゐるのに興がつたやうであるが、日本を見たら何と云ふであらうか。建築だけは南米は立派であるが、其他は遙かに北米に劣ると云つた彼の目に、日本は果して何と映ずるであらう。感想をききたいものである。

は、知る人ぞ知るである。眞に偉大な藝術を求めようとする少數の人々のために、此大家の小傳を掲げて置く。

レオポールド　ゴッドフスキーは一八七〇年二月一三日に露領波蘭土のヸルナに生れた。現時第一流の洋琴演奏家である。ヸルナで二年間研究した後一八七九年、漸く數へ年十歳で初演奏をし、波蘭土と露西亞に演奏旅行をした。後二年を經て、一八八一年に伯林の王立高等音樂院に入學し、ルードルフに就いて一八八四年迄研究を續け、業成るや同年より翌一八八五年にかけて亞米利加に樂旅を試みた。

一八八六年には巴里を訪れて更らに技術の練磨に心を潛め、一八八七年より九十年迄サン-サアンスに就いて研究した。此年再び亞米利加に渡り、翌九十一年迄再度の樂旅を試み、名聲日に擴まり、月に高まつた。一八九四年には費府のフロード　セント　コンサヷトリの洋琴部の部長、一八九五年には市伽古音樂院の洋琴部長となり、又各都市の演奏會に出演した。

一九〇〇年再び伯林に歸り、居を定めて後進の誘掖に從ひ、更らに廣く歐洲大陸に幾多の樂旅を試み、聲名益々高く、各都市の音樂院は一齊に目を此洋琴演奏の巨人に注いだ。併し其中で遂に彼を射落したのは維也納であつた。斯くて一九〇九年『クラフィーアマイスターシューレ』の校長たらんがために維也納に赴き、『宮廷御用掛』に任ぜられた。

一九一二年合衆國に三度樂旅を試みて空前の大成功を博したので、再度米國に居を定め、紐育に住むやうになつた。

作品の中洋琴曲では左に擧げるものが有名である。

ホ調奏鳴曲、（五樂章）

ショパン　練習曲に據る六十練習曲

二十四ワルツェルマスケン

二十四ルネッサンス　ピエス

シュトラウスの圓舞曲（『藝術家の生涯』、『蝙蝠』、『酒と女と歌』）に據る交響樂的變奏曲三つ。

エーバーの作品（『モメント　カプリッチオーゾ』

阪、神戸に於ても演奏するとの事、定めし好樂家を喜ばせるであらう。

ヴイオリンではピアストゥロ、エルマン、ヴィムバリスト、パーロウの如き大家の妙技に接し、聲樂に於てはザルスマン、シューマン・ハインクのやうな名家に親しみを得、チエルロではシコラの如き鬼才に接し、ピアノに於てはスクラレフスキー、オーレ、ポドルスキーのやうな名手を聽くことが出來た我樂界も、是等の名人、名手の藝術を正しく理解することは出來なかつた。多くは米國の評判を聞いて大騷ぎをするに過ぎないのであるから、ヸクターの蓄音機にでもはいつてゐないと、どのやうに優れた藝術家でも滿員の盛況を見ることが困難であつた。柴田環夫人のやうな低級な藝人風の獨唱會がいつも滿員で、ピアストゥロの會が殆んどがらあきであつたこと、スクラレフスキー敎授の比類無い演奏が顧みられなかつたこと、近くはパーロウ女史のヴイオリン獨奏會のやうな比倫を絶する演奏會が、半額日を除いては、六分位しか參會者のなかつた事は、まだまだ中央樂界の低級な趣味と、すべてに於て敎養が貧弱であることを遺憾なく暴露した實證である。殆んどこれらの會には音樂の保護者を以つて任ずる人の姿が見えなかつた。さうしてパーロウ女史の最終日の如きは熱狂する聽衆の喝采に答へるために、再び扉を排して舞臺に現はれ、樂器を肩に當てゝ將に禮奏に移らうとしてゐるのを見乍ら、一等席に在つた某々二氏は座を立つて出た。いづれも新人中の新人、先覺中の先覺を以つて自らも任じ、世も許してゐる人である。このやうなことでは今後とてもかうした心ない事が幾度となく繰り返されることであらう。悲しいことである。

ゴッドフスキーはもう大平洋上に浮んでゐることであらう。願はくは此好機會を失はず、出來得る限り都合して多く聽くやうにしたいものである。運動會や、帝展に影響されるやうでは心細いことである。前にも述べた通りゴッドフスキーはヸクターに入れてゐる人ではない。コラムビア レコードの藝術家である。從つてあまり我邦に知られてゐないが、現時第一流の洋琴演奏家であること

レオポルド　ゴッドフスキー

牛　山　充

此秋我邦を訪れる名手が二人迄コラムビアレコードに入れてゐるのも偶然とは云へ、妙な暗合である。神田淡路町一ノ一にあるコラムビアアショップに就いて調べると、ゴッドフスキーの吹き込んでゐる盤は左の六つである。

L一〇六九　圓舞曲作品四十二、ショパン、い、ゴンドリエーラ。變ト調、ろ、我若し鳥なりせば、ヘンセルト。

L一〇八七　きけよ、きけ雲雀、シュバート・リスト。カムパネルラ（鐘）リスト。

L一〇八八　無言歌二曲、メデルスゾーン、一番ト長調、二番蜜蜂の結婚。ショパンの前奏曲、甲、變ロ調、乙、ヘ長調。

L一〇九五　前奏曲、變ニ調、ショパン。圓舞曲、嬰ハ長調、ショパン。演奏會用練習曲、變ニ調、二番、リスト。

L一一五〇　グノーメンライゲン（地神の輪舞）リスト。

L一一七一　搖籃曲、ショパン、甲、黄昏曲（セレナーデ）、モスコフスキイ、シャルフェベーグ、乙、圓舞曲、ホ短調、ショパン・ヨゼフィー

以上孰れも兩面、十二吋、淡青標盤である。同店に就いて尋ねたならば大抵手に入れる事が出來るであらう。ゴッドフスキーの東京に於ける演奏は十一月一、二、三、四、五の五日間で、場所は帝國劇場である。東京演奏後横濱、名古屋、京都、大

出來るやうにもう二十年有つことが出來たらばどんなにか嬉しい事だらうと思ふ。歌唱（ゲザング）と云ふ此學問（ヴヰッセンシャフト）は極めて興味深いものであるから、いくらやつても決して嫌になると云ふ事は無い。學べば學ぶ程、まだまだ學ぶ可きことは無限にあるといふ事を益々よく覺るやうになる。』

『私にとつては聽衆が夢中になつて狂氣の如く喝采しようとも、又は靜かに、じつとして考へに沈んで聽いて居ようとも何の變りも無い。たとへ私が私の個性と、能力と、其作に對する私の愛とを歌ふべき役又は歌曲に籠めることが出來てそれが喝采されたとしても、それに對して聽衆より送られるすべての感謝を私自身に受けることは謝絶する。さうして私は其喝采を今私が通釋して歌つてゐる作品を作曲された人に贈るべきものであると思ふ。若しも私が其作曲の考へを公衆に解らせる事が出來たならば、其出來たと云ふ事實の中に報酬は自ら含まれてゐるのでてるから、私は其上に何物をも受けはしない。

寔に至言である。服膺すべき金玉の言である。公衆の前に立つて歌ふ人々は大抵自己の成功だけしか考へない。其念とするところは只音樂其物に對する賞讃を獲得する事だけである。リルリ　レーマンの高さに昇る者が極めて少いのは此理由に外ならない。利己主義に對する罰は利己主義その物である。藝術に於ても人生に於てもこれは萬古不易の眞理なるを失はない。

其圖解を二色刷りに添へて居るのを見ても解る。又女史の歌ふ歌曲目錄（レパトアー）中最も世の好評を博してをる歌曲の二三を如何に通釋して歌ふかと云ふ事を說くために一章を費してゐる（本文三十〇章參照）此中には有名な歌ひ手製造所を猛烈に攻擊し、此狀態（これは又一方に於て無智の支配人、及び利慾のためには手段を擇ばない不德な支配人達の所行に依つて助長されてゐる）を、音樂院（コンサヴアトアール）に於て昔八年の歲月を費して修業させた時代と對照させてゐる。演奏會の時間の長さ、喝采、聽衆の行儀作法、其他音樂愛好者に取つて興味津々たる多くの事項に關する夫人の所感が述べられてゐる。呼吸に困難を感ずる初學の人々は、著者たる夫人も亦生れつき極めて氣息の短いために困難したと云ふ事を讀んで知つたならば大に慰めらるるであらう。さうして又如何にして夫人は此困難に打ち克つことが出來たかといふ、其方法に興味を覺えることゝ思ふ。夫人の藝術家的性格に關し、私の云ひたいと思ふ處は大略上述の如くであるが、今やこれを結ぶに當り尙ほ二つだけ夫人の筆になるものを引用しようと思ふ。一つは新聞紙に寄せた論文の一節であり、一つは上來屢〻引用し來つた『獨唱の仕方』の一節である。シューバートの『魔王（エルケーニヒ）』も含まれてゐる。又夫人は僅か二年位で歌ひ手を世の中に抛り出す

『唯一の純粹なる悅びは藝術の研究及び修業に在るので、其結果として來る成功に存するのではない。研究の喜び、獲得の樂しみは永續的のものである。然るに成功の悅びは果敢い電光の如きものである。私は一人男の聲樂家を知つてゐるが、此人に取つては絕えず斯の道の研究をしてゐるのが極めて純粹な喜びであるために、まだ若いにも拘らず公衆の前に出て歌ひ、喝采を博さうなど〻云ふやうな考へは少しも有つてゐない。私はどうかと云ふと、若しも出來る事ならば、尙ほ一意專心に研究が

けることも許されよう、併し、若しも大きい娘が殺される時の鳥の苦しみを知り乍ら、尙ほそれを着けてゐるならば、假令直接に手を下さない迄も、可哀想な白鷺や其他の鳥及び其雛を段々に餓死させるのを手傳ふ事になるのであるから、斯かる殘忍の心ならば、假令自分の聲はどれ程美しくとも、其樣な心では偉大なる歌劇の役や偉大な歌曲を通釋して、聽衆を滿足させ、更らに進んでは皆を深い感動に打たれるやうにさせるやうなことは、到底出來ないのであると觀念すべきものである。

夫人が閨秀音樂家中殆んど例外とも見る可き程高い思想と知識とを有する事について、リルリ　レーマンは其歌唱藝術に關する名著と『フィデリオ』の分解中に十分其證據を示して居る。此フィデリオの研究はベートーヅェンの歌劇の精神的內奥を探らうと思ふ人々に取つては最も重要な暗示が澤山含まれてゐる良書である。女主人公の役に對する女史自身の考へを述ぶるに當り、斯う云ふ立派な物を演出しようとして苦心するやうな大藝術家の少いのを嘆じてゐるが、苟も此歌劇を研究する人は何人と雖も女史に和して同じ歎聲を洩らすであらう。歌唱術に關する女史の著述（譯者言、拙譯『獨唱の仕方』）は、獨逸語の表題は „Meine Gesangs-Kunst “（我が歌唱法）と云ふのであるが、これはそれに依つて女史自ら其藝術を習得した方法（プロセス）を述べた一種の自叙傳的記述である。

聲樂法の研究者ではない讀者と雖も、夫人が該書中に於てパッティ、メルバ、ニーマン、ベッツ、ワッハテル、及び其他の著名な樂界の名人に關して語る處を聞くのは興味あることであらう。該著中に於ける夫人の說明の親切を極め、微細を盡してゐることは、たつた一つの „Fräulein（フロイライン） “ と云ふ語を夫人自ら如何に歌ふかと云ふ事を說明するのに、本文だけに殆んど一頁（拙譯では三頁一七七、一七八、一七九頁參照）を費し、更らに

した後で、誰も居ない劇場に行き、續け様に何時間も何時間も全體の歌劇は勿論一つ一つの場面をも下稽古した。此ために最後の一音に至る迄十分に能く思ふ儘に共鳴させる事が出來ると云ふ確信がついた。さうしてなほもう一度初めから歌ひかへして見る事が出來ると思つた事も極めて屢々あつた。凡べてやり甲斐のある事を成就したいと思へば誰でも斯うしなければならないのである。』

ところがパッティはさうではなかつた。併し彼女は此規則を證明する幸福な例外である。加之、パッティが平生歌つた役はレーマンがあんなに時間と勞力とを捧げた物よりも單純であつたので、頭腦にも感情にも遙かに僅少の負擔を與へられるに過ぎなかつた。此問題に就いては、ジャン　ドゥ　レスクに關する章中に於て更らに説明することにする。

リルリ　レーマンが其大なる成功を負ふのは主として何であらう。云ふ迄も無く一部分は其甘く美しい聲に負ふてゐるが、それよりも遙かに多く女史が考へ且つ感ずる人であると云ふお蔭である。考へもせず感じもしない歌ひ手ならば、假令如何なる天與の美聲を有し、艶容を擁して居つても、イゾールデの如く、ブリュンヒルデの如き役を滿足に通釋し、演出する事は出來ないのである。さうして又獨逸が生んだ此最大なる首席歌優（プリマドンナ）は其藝術に於ける內奧の美質は云ふ迄も無く、尙又人生に於ける夫人の精神の奧床しい性質を示してゐる。夫人は死後其藝術上の所得を擧げて盡く之れを動物虐待禁止會に贈らうと考へてゐる。夫人の胸はひとり人類に對する同情ばかりではなく、尙ほ多くの婦女が流行のために、無慈悲にも又殘忍にも平氣で虐殺させる、彼の『翼ある御空の詩（ヴィングッド・ポエムズ・オブ・ジ・エヤー）』に對する同情に溢れてゐるのである。扨、頑是ない女の兒は何も知らずに一羽の鳥か、又は其一部分を帽子の飾りに着

蠱惑的(チャーミング)であつた。

リルリ　レーマン夫人は去る五月十五日に五十回の誕辰を祝つた。夫人は自己の年齡を隱さうとはしない。又何で隱さうとしなければならないか、其樣なことをする必要は無いのである。夫人の聲は勿論以前よりは早く疲勞しやすいのは云ふ迄も無いが、相變らず甘く美しく、圓熟してゐて、燦然たるものである。さうして又女優としての夫人の藝術は今日の知く心地好い程立派であつたことは從來未だ嘗てなかつた處である。聽衆は以前の通り、少しも渝らぬ同一の『リルリ』であることを期待してゐた。さうして其第一聲を聞くや否や、年齡こそ重ねたが、昔ながらのリルリであることを知つた滿場の人々は、嵐のどつと押し寄せるやうな喝采をした。さうして幕が下りると又新らしく拍手して止まなかつたのである。女史は今や三十年近くワーグナーを歌つて來た。さうして此ために、ワーグナーの音樂は、若しも之を怒鳴らないで歌ひさへすれば決して歌者の聲を害するものではないと云ふ、顯著なる生きた證據を世に提供してゐるのである。ベルリーニの『ノルマ』は夫人が最も得意として愛唱する役の一つである。さうして又グルックの『アルミーダ』をジャン　ドゥ　レスク氏（氏の女史に對する崇拜は、氏の兄弟の女史に對するのと同樣に無限である）と一緒に歌ふことを切りに望んで居る。どうか此計畫が實行されることを吾人は切望して止まない。』

夫人は其名著に於て、夫人が『イゾールデ』を稽古した時の話しをして居る。此頃女史は『少しも疲勞しないで、第一幕だけを續け樣に發相と所作をつけ、一杯の聲を出して六回も歌ふ事が出來た。私はすべて私の役を練習する時には皆斯ういふやうにしてやつた。一つの役を自分の部屋で千回も下稽古

戀、憤怒、嘲侮、苦惱、悲哀、復讐、歡喜等の樣々の感情の表出に於てリルリ　レーマンの如く成功したものは一人も無かつた。同樣の讃辭は、女史がワーグナー物のもう一つの役、特にブリュンヒルデに扮したのにも捧げることが出來る。是に關しては當時私が『イーヴニング　ポーッスト』紙上に於てした批評より玆に數節を抄錄する。

『メトゥロポリンタン座に於いて獨逸歌劇の上場を停止して居つた事があつたが、其停止されてゐる幾月中に於て、恒に歡迎される人が少くとも一人あつた。反對派に屬する人々に迄も此一人だけは常に歡迎した。劇的上高音歌手中に於ける女王リルリ　レーマンは寔に斯の如き最高至上な、完全無缺の藝術家であり、實に申分なく練磨の功を積んだ聲樂家であり、極めて多方面で行く處として可ならざるは無く、趣味及び才能に於て非常に廣大を極めてゐるために、女史はあらゆる支配人の爭つて熱望する處となり、其聲望は寔に旭日昇天の概がある。近年來女史は當市に於て面白からぬ事情の下に出演して居つたが、今や再びグラウ一座の員に列してゐるので、苟もワーグナーを愛し、善良なる歌ひ方を好む人々は一般に皆これを喜んでゐる。女史は昨晚今年度に於ける第一回出演をして、『ワールキューレ』中のブリュンヒルデに扮した。役割は女史の外にエムマ　イームス、ヴン　ダイク、及びヴン　ルーイと云ふ名流揃ひの立派なものであつた。昨夜は僅々數週間内に於ける『ワールキューレ』の第四回上演ではあつたにも拘らず、滿員であつたのは當然の事である。ヴン　ダイク氏とヴン　ルーイ氏は能く歌つた。イームス夫人は、ジークリンデに扮して今迄に無い程音樂的であり、劇的であり、且つ金髮の鬘をつけたために、夫人の美しい、あのふさふさとした漆黑の髮を隱されたにも拘らず、

を立て逐癇癪紛れに『聲』なんかありやしい、たゞ誰にも出來ない程人を動かす事が出來るだけだと怒鳴りたいやうな氣になつた。云ふ迄も無く、それと同時に『さうだ、實に其美しい聲を有つてゐる。まるでパッティの聲に似た天鵞絨（ビロード）のやうな』と云ふ事が出來たならば、どれ程彼には喜ばしかつたか解らないだらうと思ふ。不幸にして彼は彼の理想的の歌者たるリルリ　レーマンが、其得意の絶頂に達し、全盛時代にはいつてからイゾールデを歌ひブリュンヒルデを歌ふところを生き永らへて聞く事が出來なかつた。併し彼は一八七六年度のバイロイト第一回祝祭興行に際し、出演者を自ら選擇した時、森の鳥と、第一のライン乙女として早速女史を雇聘した。何故此樣な役をつけたかと云ふに、まだ此頃は餘り若かつたので、其聲も從つて輕過ぎたために、重い役を振る事は出來なかつたからである。

併しリルリ　レーマンがワーグナー音樂の通釋者として、最高の偉才を發揮したのは、伯林では自分の思ふやうな役が歌へないので、此處の契約を解き、大西洋上の人となり、新大陸に於て其運命を開拓しようと思ひ立つて、彌々紐育の樂界に現はれた時の事であつた。八年間、女史の生涯の最も大切な時代の八年といふ歳月を亞米利加の首都で暮らした。さうして此時の役割（カスト）は女史の外にも尙ほ第一流の人々を多く含んでゐた上に、管絃樂は大抵あらゆるワーグナー物の指揮者の中で最大の稱を擅にしてゐたアントン　ザイドゥルの指揮の下に在つたので、其結果此八年間の樂季（シーズン）は紐育に於ける獨逸歌劇の黃金時代として、永く世人の記憶に殘るべき物であつた。紐育だけでも偉大なる歌者でイゾルデに扮したのが六七人あつた、併し其中に描寫、所作及び歌に於て、又此役の中に交互に現はれる

りの誘拐』を歌つて巴里全市を驚嘆させた當時の事をよく覺えてゐる。此時或る一人の音樂家は嬉しさの餘り叫んで、『恰度昔のえらい名人達が以前歌つて居つたのと同じやうに、たつぷりとした、ありつたけの聲を以つて歌はれる、昔ながらのゆつくりとした華唱物(コロラトウール)をもう久しく聽くことが出來なかつたが、今度思ひもかけずこれを耳にした、こんな嬉しい事は無い』と云ふのを聞いた。我同胞の中には又同じ此偉大な藝術家がボストン劇場で、ベルリーニの『ノルマ』の中の Bello a me ritorna を歌ふのを聽く事が出來た者がある。これは感情の緊張した力に充ち、表現的な大切の細部に悉く最大の注意を拂つた、何とも云へない程偉大な劇的歌唱であつた。それこそ昔の儘の本式な堂々たる、瑰麗雄偉の趣きを極める歌ひ方であつた。然るに女史以外の歌者達は大抵、同じ此曲を只咽喉の輕妙を示すに過ぎない極めて輕いものとして我々に示しただけであつた。』

斯樣な譯であるから、リルリ　レーマンは獨逸人であり乍ら、華麗な音樂を劇的に歌ふと云ふ、今や既に滅亡し終つた歌唱術に於ける近代伊太利聲樂家の典型となるのである。それから又女史の時代の獨逸派聲樂家達に取つては、劇的音樂(ドラマティッシェ・ムジーク)を伊太利亞風美唱法(ベルカント)のあらゆる優麗典雅な趣きと品位とを以つて唱ふ、新らしい歌唱法の手本となつたのである。寔に驚嘆すべき聲樂家、驚異の藝術家ではないか。

既に述べた如く、リヒャルド　ワーグナーは絕えず其嘆賞崇拜して止まなかつた歌者シュレーダー・ドゥブリアンに就いて、『彼の女の聲』はそれ程驚嘆すべきものかと、尋ねられるのが、うるささに腹

も覺えて居るところの或る昔の歌劇通から手紙を受け取つた。其人は外にも多くの作がある中で、特にロッシーニの『セミラミーデ』は、『大劇的役割（ソプラーノ・ズフオガート）』として書かれ、且つ一般にさう評價されてゐたもので、輕快で華麗な、極めて高い上高音のために書かれたのではない、即ち歌劇界の『カナリア』のために作曲されたものではないので、重い劇的上高音歌手（ドウラマティッシエソプラン）、例へばティティエンス若しくはリルリ レーマンのやうな人のために作曲されたものである。と云ふ事實に注意する事を段々要求してゐる。凡べて彼の華麗を極める燦然たる麗唱曲（ルーランド）を我々は純然たる聲樂上の花火、で只輕妙な、自由自在に動く聲にだけ適するに過ぎない物であると考へてゐるが、元來これは十分に聲を震はせ（震音（ヴイブラート）で）、極めて堂々たる戲曲的の發相をつけて、ずつと緩くり歌はれたものである。

斯種の曲を戲曲的に、且つ堂々と壯大に歌ふなどと云ふ事は、今日の我々から見ると餘程無理に想像力を引き伸してもしないと、考へられない事である。併し夫れにも拘らず、疑ひも無くもとはさう歌はれるべき物であつたのである。昔の『劇的』華唱はたつぷりした豐富の聲一ぱいに、中庸の速度と云ふのであるから、少し徐か位に歌はれたものであるが、今日ではもうそれは餘程遠い昔の事となつて了つた。さうして『セミラミーデ』の麗唱部（ルーラード）は、現今ではもう輕い聲で、半聲（メツツア、ヴオーチエ）を以つて、殆んど頸の骨が折れさうな速さ、眼が廻るやうな速度で歌はれる。昔の堂々たる歌ひ方や、劇的の緊張した力などは最早此種の音樂には聞かれなくなつて、只聲の輕業や輕妙な咽喉の技巧を見せびらかすことが之に代つて了つた。

一八九〇年の冬から九一年の春にかけての樂季に、リルリ レーマンがモーツァルトの『セラリオよ

たけれども、華麗な音樂を種々の感情の色と文(あや)とを以つて染め分けてゆく、自由自在の手腕に於ては決してバッティの追從を許さなかつた。これは凡べて歌唱藝術の薀奥を究めようと欲する人々に取つては極めて重要な事であるから、特に此事を少し力說しなければならない。前に述べた名著中に於て、リルリ　レーマンは次の如く語つてゐる。

『若しも其歌者が巧妙ならば、如何なる淺薄な樂句にも又華唱(コロラトウーラ)の樂節にも感情の或る表現力を賦與する事は出來る。斯樣なわけでなるから、私はモーツァルトの抒情調の華唱樂節に於ては、種々の漸强唱(クレツシエンディ)呼吸のために重大な意味を有する箇所の選擇、及び樂句(フレーズ)の分け方等に依つて、表現力を得ようと努力した。私が此方法を用ゐて特に成切したのは『ゼライルよりの誘拐』である。即ち華唱樂節によつて第一の抒情調には悲嘆の音調(トーン)を入れ、第二の抒情調には英雄的な威嚴を入れたのである。餘り價値の無い、つまらぬ細部(ディテイル)を誇張するやうな愚擧に陷らずして、苟も藝術家たる者は、自己が正當に行使する權利を有つてゐる發相、表現のあらゆる手段と方法を開拓して行かなければならない。』(本文一七六頁參照)

換言すればリルリ　レーマンは歌唱に際して其咽喉は云ふ迄も無く、其頭腦を能く用ひたのである。燦然たる華麗な音樂を天下稀に見る程立派に歌ふ事に、どれ程女史が成功したかと云ふ事は、ウヰリアム　フォスター　アプソープ氏の好著『音樂家について』中に於て語る處を聞くと明らかに判るであらう。

『つい此頃の事であるが、私は全盛期のロッシーニ歌劇を記憶し、又これを歌つた有名な歌者達を今

は日々歌劇、小歌劇、(歌劇に比し普通輕い戯れがかつた物)戯曲、及び笑劇(道化芝居、茶番狂言の類)に出演した。それから一年半ばかりダンツィッヒに赴き、一ヶ月間に十八回から二十回位華唱物とスーブレット(滑稽歌劇に出る腰元役で、立女形の下位に立つ滑稽な役割)とを歌つた。ライプツィッヒに於ても同様であつた。それから後伯林に轉じて、此處に止ること十有五年、主として困難な華唱物を演じた。

華唱物とは如何なる物であるか。それは普通パッティが歌つてゐるやうな物で、其主要な特質として、裝飾的な斷唱音や、顫音や、麗唱音及び其他聲樂上に使用される裝飾を多く含んだ燦然たるものである。後、當時第一流の劇的下高音歌手となつたリルリ レーマンは實に其生涯の前半に於ては華唱歌ひ手であつたのである。

此事實は極めて重要な意味を有つてゐるではないか。當時女史が伊太利亞風の美唱法(これはワーグナーでさへもすべての學習者に習得せよと、口を極めて勸めたものである)に於て獲た歌唱術の熟練が、後年劇的歌唱のあらゆる困難を征服し、聲音の美に加ふるに發想力の大と、表現の自由とを以つてするにどれ程女史を助けたか解らない程である。

平素ワーグナー物で、イゾールデやブリュンヒルデに主として扮してをるリルリ レーマンのみを記憶して居る人は、華唱物に於けるパッティの競争者としての女史を想像することは困難であらう。併し實際パッティと覇を争ふ立派な華唱歌手であつた。さうして假令女史は歌ひ方の輕妙なのと、自然に滾々として流れ出すこと、恰も雲雀の歌の如くであつた點に於てはパッティに一籌を輸しては居つ

リルリ　レーマンはヴュルツブルで生れたのであるから、バイエルン人であるが、其歌劇界に於ける生涯の大部分を送つたのはバイエルンの首都たるミュンヒェンではなくして、伯林と紐育とである。女史の初舞臺はボヘミヤで、其歌劇はモーツァルトの『靈笛（ツアウベルフレーテ）』であつた。メイヴル　ワグナルズの著はした『歌劇界の明星（スターズ・オブ・ジ・オペラ）』の中に、女史の言として次の言葉が載つてゐる。『私は輕い方の役割を勤める事になつて出た。ところが二週間經つてから上演中に劇的上高音歌者（ドウラマティッシエッソプラン）が急に病氣に罹つたので、兎に角二週間舞臺で其役割を此人が歌ふの聽いてゐたのであるから、自分の記憶力を信頼して、私が代つて其役を歌ひ續けることになつた。すると母は此時聽衆の中に居つたのであるが、私が一度も此役を稽古した事が無いのを知つてをつたので、其人の衣裳を着けて舞臺に出て來るのを見るや、心配の餘り氣絶して了つた。』

プラーハ劇場に出て居つた間は　多くの歌劇に出演したばかりではなく、尙ほ女優として幾多の戲曲を演じたのである。此頃はまだ今日のやうに　俳　優（シャウシュピーラー）　と歌優（ゼンガー）との仕事の區別は明瞭になつて　ゐなかつたので、必要のある度毎に　俳　優（シャウシュピーラー）　は歌ふべきもの、歌優（ゼンガー）は（音樂無しに）所作を演ずべきものと考へられて居つた。初め　女　優（シャウシュピーレリン）　をしたために、ジェニー　リンドも、シュレーダー・ドゥブリアンもリルリ　レーマンも、其歌劇界に於ける生涯にどれ程利益であつたか知れないといふ事を考へると、これから歌劇界に入つて名を擧げようとする人々に向つては、是非とも是等名人の範に倣ふことを切に勸めんと欲せざるを得ないのである。

リルリ　レーマンがプラーハに於て歌劇の初舞臺に立つたのは十八歲の時である。此都に居つた間

して止まぬ人々に至高の喜びを與へてゐたのである。女史は其聲樂術に關する名著の中に於て、女史の母堂（母堂も亦歌劇歌者であつた）はその聲を生を終るまで、即ち七十七歳の高齡に達する迄、氣高く、美しく、若々しく、且つ強く維持して居つた。それ迄の間には隨分過重と思はれる程の負擔が其聲に課せられたのであり、且つ幾多の運命の打擊を蒙つたにも拘らず、決して叙上の性質を失はなかつた』といふことを述べて次の如く書いてゐる。『母は非常に多く歌ひもし、又數々の不幸にも遭遇したが、それにも拘らず、其一生を終る迄、即ち七十七歳で歿くなる迄その聲の立派さ、美しさ、若々しさ、及び力強さを失はなかつた』。

リルリ　レーマンには少しも衒氣が無い。氣取るやうなところは微塵も無い。明らさまに讀者に向つて『私の場合のやうに澤山、望ましい、又無くてはならぬ先行條件の集まつてゐるのは極めて珍らしいことである』と卒直に語つてゐる。女史の母堂（マリー　レーウ）は多年の間、單に劇的歌者としてのみではなく、尙ほ又竪琴(ハープ)の名手として大に活動した人であり、父君も亦歌者であつた。女史は母堂が其弟子に敎へるのを傍で注意して聽いてゐた後、五才の時より唱歌の稽古を其母堂より授けられた。『九歳の時より洋琴で伴奏を彈き、佛蘭西語、伊太利亞語、獨逸語、ボヘミア語で缺けた部分を皆歌ひ、凡べての歌劇に全く通曉し、直にもう良い歌ひ方と惡い歌ひ方との區別がつくやうになつた。私共の母も亦注意して當時歌劇界や音樂界の歷々の名人が訪れて來ると、殘らず私共にも聽かせるやうにして吳れた。さういふ大家達は每年プラーハの獨逸國立劇場(ドイチユスランデステアター)に大勢出演したものである』と女史自ら書いてゐる。

ワーグナーの理想たりしリルリ　レーマン

（フィンク著『成功音樂家列傳』の一節）

牛山　充

此一篇は拙譯『獨唱の仕方』の中に收め、近代文明社より出版したものである。リルリ　レーマンの風貌に接したいと思はれる人々のため玆に採錄することにした。

以上列叙する處を讀過した人々の中には、或は嘆を發して叫ぶ者があるであらう。

『若しも世にアデリーナ　パッティの甘い滴るやうな美しい聲と、完全無缺の唱ひ方とを備へた上に、尚ほシュレーダー・ドゥブリアンの強い情緒力と鋭い劇的直覺とを兼ねた人があつたならば、嘸素張らしいものであるだらう！』と。併し斯の如き大聲樂家が約四十年の長日月の間、實際に舞臺の上に立つて、其優秀なる殆んど比倫を絶するかと思はれる程の妙技を揮つてゐた、さうして其驚嘆すべき藝術によつて、全生涯中に受けた印象の中で、最も深く最も強い感銘を負ふて居る人々は、世に幾千あり、幾萬あるか知れない程である。然らば此大藝術家は果して誰であるか。リルリ　レーマン即ち其人である。

女史は一八四八年の誕生であるが、此世に呱々の聲を擧げてより六十年の後尚ほも歌曲の獨唱會(リサイタル)及び、時々上演されるモーツァルト、ワーグナー、若しくはヴェルディの歌劇に於て、女史を崇拜し、渇仰





チニイ蓄音機

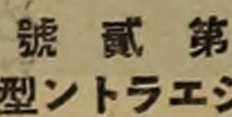
聲音學の大家田邊尙雄氏曰く

「近頃岡本洋行の手によつて米國から輸入せられてゐるチニイ蓄音機は、發音裝置が精巧に出來てゐて、全く一個の藝術である。今迄最も優秀だと思つてゐた蓄音機もチニイに比較すると旭日の前の月光の如き感がある。」と。

第拾號オーケイ型

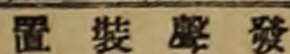
定價 金貳百貳拾圓

高サ十四吋 間口並ニ奥行各十七吋



第貳號 シエラトン型

定價金四百五十圓



發聲裝置

東京市京橋區銀座二ノ一五 株式會社 岡本洋行 電話京橋三三五一 六三七三・六三七四

新刊

元森信夫先生著

誰にも解る樂譜の説明

▽四六版全一册
▽洋裝優美
▽定價一圓也
▽郵税六錢

現代の世の中に文字が必要なる如く現代の音樂にも樂譜が絶對に必要なものとなつた。本書は音樂に用ひらるゝすべての音符や記號及音階音程等を誰れにも解るやうに詳しく説明したものであつて著者は自序の中に「あらゆる自信とあらゆる良心とに從つてあらゆる好樂家にすゝむ」と言つて居る事から見ても本書の内容が如何にすぐれて居るかゞ想像される筈である。音樂に趣味を有しながら樂譜の讀めない人や、殊に女學校等で樂典を學んで居る人々に是非本書の一讀をすゝむ。

必備書

音樂の聽きかた

米國クレエビイル原著　學習院教官　小松耕輔先生譯

▽四六判洋製美本
▽紙數三六〇頁
▽定價二圓五十錢
▽郵税十八錢

原著者は本書の序論に於て「本書の目的は簡單明瞭であつて別段大ざさなものではない。本書は音樂の教授や學者を啓發するのを目的とはしない。本書はそれ相當の謙讓なる態度を以つて、直接に音樂學生に寄與しようとするのである」…と云つて居る通り好樂者にとつては實に好箇の羅針盤である。歐米にあつては此の種の書籍は隨分たくさんあるが本書の如く多方面に亘つて興味深く且つ眞に音樂を味解して其の解明に當つたものは多くその比を見ない。特に譯者は斯道の名家である。其の豐富なる樂才と流麗なる譯出とは原著者の意を髣髴せしめて餘りある。

發行所　東京市京橋南傳馬町二　振替口座東京第二八〇九　目黑書店



レオポールド　ゴツドフスキー



キヤスリーン　パーロウ

新刊

東京音樂學校講師 牛山充譯

リルリ・レーマン著

獨唱の仕方

武井武雄裝幀

リルリ・レーマンは一世に雄視する聲樂界の女將軍である。其學殖と蘊蓄とは聲樂家間稀に見る處である。一代に其匹儔を見ない藝術の妙は洵に天馬の空を行くが如き慨がある。本書一卷が世の聲樂界を稗益する功は今更私が絮說するまでもない。……今の青年男女の中には將來聲樂の林に分け入らうとする人が尠くないであらう。此人々のために本書が何よりも信頼するに足る案內者であり、指導者であり、又相談相手となり得る事は譯者の信じて疑はないところである。——譯者序より

四六判三〇〇頁
背絹美裝天金函入
挿圖五十餘
原著者寫眞入
定價金二圓六十錢
書留送料十八錢

五版

牛山充譯

ヨーゼフ・ホフマン著

ピアノの彈き方

四六判三四〇頁 美裝天金函入
彈き方姿勢寫眞入 定價金二圓
三十錢 書留送料十七錢

水谷まさる著

五版

抒情詩集 青みゆく月

四六判石版刷表紙背絹天金函入美裝
定價金一圓五十錢 書留送料十五錢

再版

童謠集 神さまのお手

中山晋平、宮原禎次作曲五篇附
四六判 石版刷表紙 函入美裝 定
價金一圓三十錢 書留送料 十三錢

發行所 東京市神田區中猿樂町一七 近代文明社 電話九段二二五六番 振替東京五八五八六番

學友會秋季音樂大演奏會開催廣告

來る十一月十一、十二の兩日學友會秋季音樂大演奏會を開きます。時間は午後二時ですから、會員と、會友の方々は證票を御持來の上日曜日（十二日）の午後定刻迄に御來場下さい。若し日曜日に御都合のお惡い方は土曜日にお出でになつても差支へありません。其節は入口で會友證を御示しの上御入場下さい。又兩日とも新入會の方も取扱ひますし、臨時に當日だけ御入場なさりたいと云ふ方々のためにも御便宜を計つて臨時會員劵を出す筈でありますから、御知り合ひ方々をお誘ひになつて御來會さい。

注意　■下足の用意はありますが雨天でない限り靴か草履が御便利です。
■演奏中御出入は御遠慮下さい。
■喫烟は喫烟室以外では絶對に御遠慮下さい。

大正十一年十一月一日　東京音樂學校學友會

音樂第十三卷第十一號目次

明治四十三年六月六日第三種郵便物認可　大正十一年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

音樂



第十三巻　第十一號